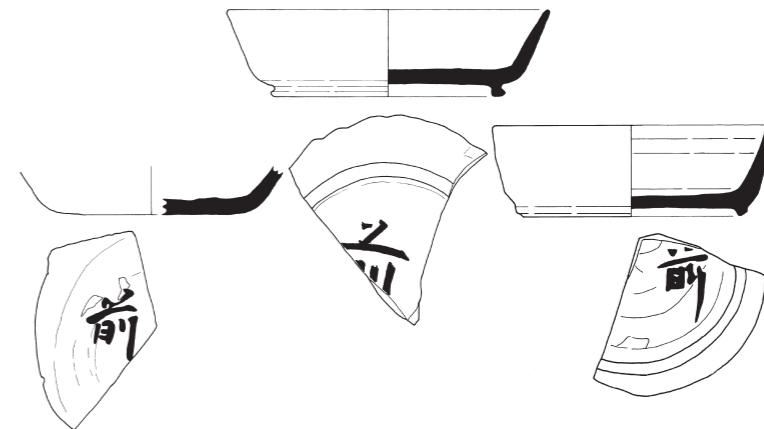


石川県金沢市

近岡シタンダ遺跡

近岡シタンダ遺跡



2025

金沢市

令和7年3月
(2025年)

金 沢 市
(金沢市埋蔵文化財センター)

例　　言

1. 本書『近岡シタンダ遺跡』は、石川県金沢市近岡町に所在する近岡シタンダ遺跡の発掘調査を扱った報告書である。
2. 本調査は、金沢市近岡町土地区画整理組合が施工する土地区画整理事業に伴い、令和5年度に金沢市が発掘調査を実施したものである。
3. 発掘調査の期間と面積は次のとおりである。

令和5年7月18日～同年9月5日 (540m²)
4. 発掘調査は、金沢市埋蔵文化財調査委員会（委員長 小嶋芳孝氏、委員 米澤義光氏、藤田邦雄氏、竹松幸香氏、田形篤子氏）の指導の下で、鏡百恵（文化財保護課主事）が担当した。
5. 本書の執筆及び編集は鏡が担当した。写真撮影は、遺構・遺物を鏡が、航空写真を日本海航測株式会社が行った。
6. 本書に収録した遺物・記録資料は、全て金沢市埋蔵文化財センターが一括保管している。
7. 本発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の機関・個人からご教示、ご協力を賜った。記して感謝申し上げる。(50音順、敬称略)

出越茂和（石川考古学研究会）
8. 屋内整理および製図は、次の方々に協力していただいた (50音順、敬省略)。

泉和美、戌亥美樹、岩崎倫子、内川一富、北井しのぶ、黒瀬輝夫、境田早苗、坂本多美子、下出敏郎、大家広美、服部祥代、福岡習子、法桑加代、森元小巻、山口小百合、脇坂景子
9. 本書の各図及び写真図版の指示は以下のとおりである。
 - (1) 遺構図の方位は全て座標北である。座標は世界測地系に基づく国土座標第Ⅷ系（測地成果2011）に準拠し、真北からは1分、磁北からは7度40分東偏する。
 - (2) 遺構平面図は航空測量により図化を行った。掲載図版に關係する遺構測量は日本海航測株式会社が実施し、図面作製も同社が行った。
 - (3) 各図の縮尺については原則としてスケールを付し、表題末にも示している。
 - (4) 遺構図の水平基準は海拔高で、単位はメートル (m) で記した。
 - (5) 遺構名は、SD：溝、SK：土坑、P：小穴・柱穴、SX：その他の遺構などの略号を用いた。
 - (6) 10m格子の北西角の杭名をもって示した。
10. 土層の色調は小山正忠・竹原秀雄2006『新版標準土色帖』（日本色研究事業株）による。

目 次

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
発掘日誌抄	

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

第3章 検出遺構

遺構平面図	15
-------	----

第4章 出土遺物

23

第5章 総括

第1節 出土した墨書き器について	36
第2節 まとめ	36

写真図版

凡 例

遺物について

1. 遺物図中、須恵器は断面図を黒塗りし、内面黒色土器は内面に目の粗いスクリントーンを貼る。
2. 遺物実測図中の記号は次の通りである。

赤彩



朱墨



遺物観察表について

1. 「番号」欄には、図版ごとに振り直した番号をついている。
2. 「器種」欄には、土器・須恵器などの材質も併記している。
3. 「法量」の計測値のうち（ ）数字については現存長を示すのに用いた。
4. 「遺存」欄には、径を復元する際に利用した部位と遺存度を記した。
5. 「胎土」に含まれる礫・砂・骨(海綿骨針)を多い=○、並=△、少ない=△で表した。
6. 「焼成」（焼と記載）については良好=○と表した。
7. 「実測番号」欄は、実測図作成時の通し番号で、遺物・実測図に付している番号と一致する。
8. 木製品観察表の「備考」欄の針=針葉樹、広=広葉樹、辺=辺材を表す。

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

今回報告をする近岡シタンダ遺跡は金沢市近岡町土地区画整理組合が施工する土地区画整理事業に伴い発掘調査を行った遺跡である。令和5年度に金沢市が540m²について発掘調査を実施した。所在地は石川県金沢市近岡町地内である。

遺跡の発見から発掘調査へ至るまでの経緯は以下のとおりである。

近岡町地内にて、金沢市近岡町土地区画整理組合が施工する土地区画整理事業が計画され、平成29年9月15日に文化財保護課へ試掘確認調査依頼が提出された。平成29年10月11日～同年10月13日に42,512m²（当時予定施工範囲）を対象に83ヶ所の調査箇所を設定したところ、30箇所から遺構と遺物が確認され、3遺跡（近岡シタンダ遺跡、近岡B遺跡、近岡C遺跡）が新しく発見された。試掘調査の結果を受けて協議した結果、今回施工範囲内に分布する近岡シタンダ遺跡について、宅地部分については十分な保護層を設けることができるので、道路部分の約540m²について発掘調査を、歩道部分の一部約100m²については範囲狭小なため工事立会を実施することで合意した。令和5年7月10日付で委託契約を取り交わし、令和5年7月18日～同年9月5日にかけて発掘調査を実施した。

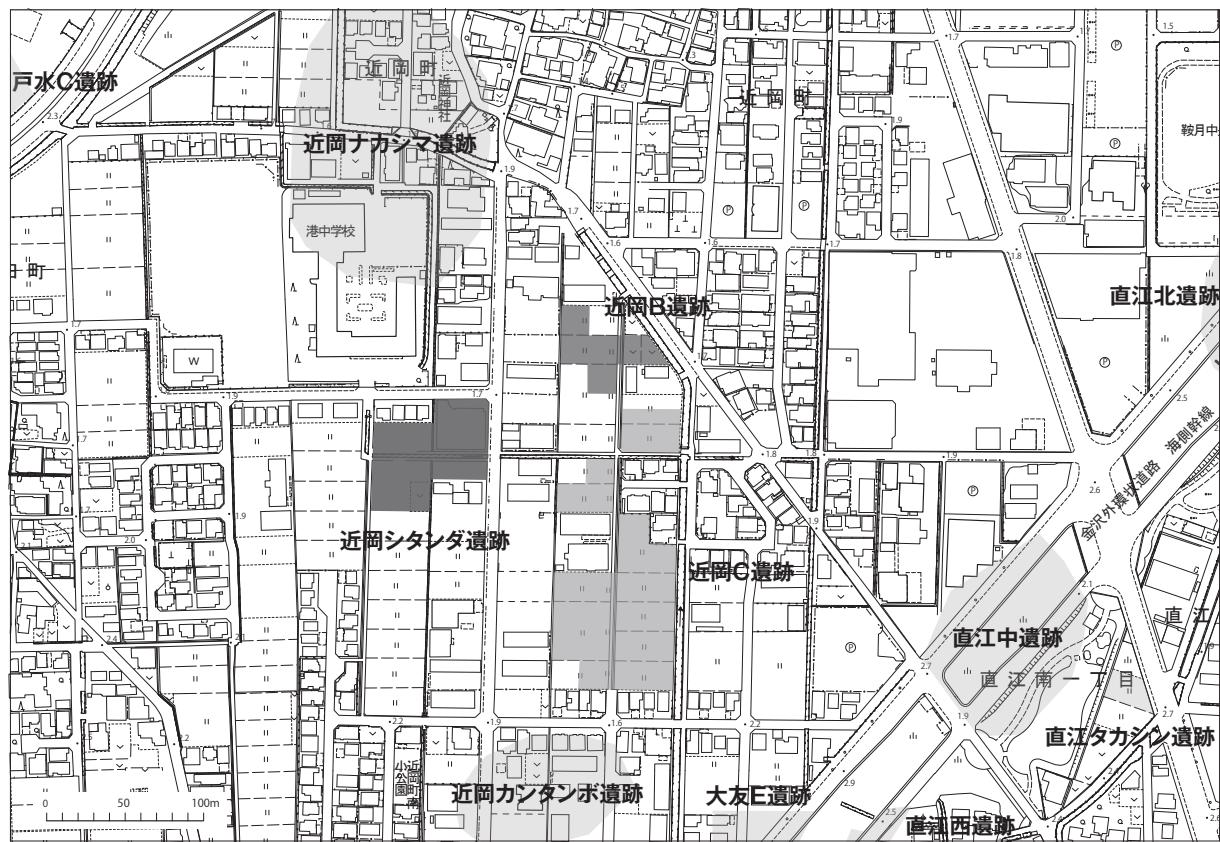
本遺跡は、今回の近岡町土地区画整理事業に伴う試掘調査で新しく発見された遺跡である。遺跡名称の決定にあたり、土地所有者に聞き取り調査を実施し、当該地が小字名「シタンダ」と呼称されていることが判明した。漢字では「下田」と表記することであったが、土地の古くからの呼称に歴史的背景が潜む可能性があり「読み」を重要視する観点から、本遺跡名称を近岡シタンダ遺跡とした。

第2節 発掘調査の経過

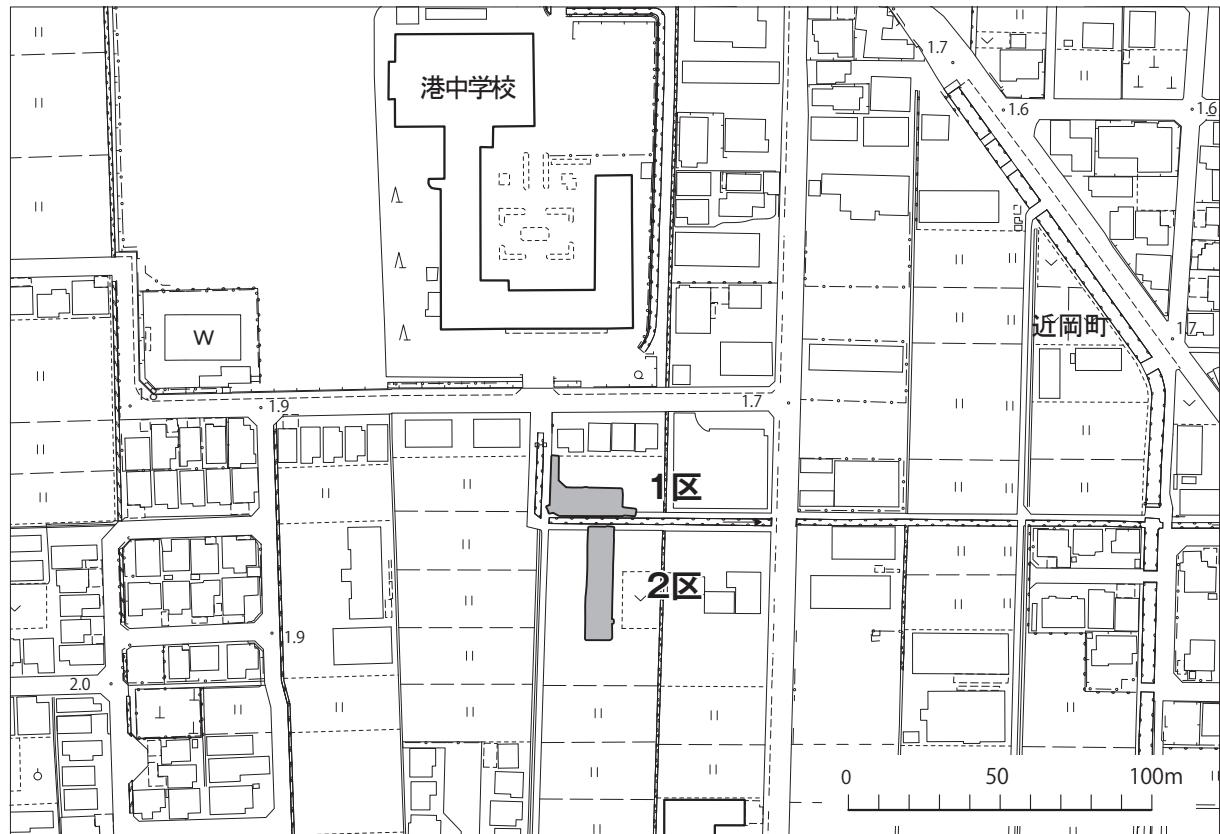
発掘調査に先立ち、調査区範囲の設定を近岡町土地区画整理事業の工事施工者である金剛建設株式会社が行い、表土除去等に必要な掘削機、作業に用いる足場板やベルトコンベアなどの発掘機材、現場事務所については同社の協力を得て、発掘調査を開始した。

【発掘日誌抄】

令和5年（2023年）	8月19日 2区 遺構検出（～8/24区 2/4完了）
7月18日 1区・2区 表土掘削開始（～7/20）	8月28日 2区 溝（SD20）を検出
7月21日 1区・2区 調査区周囲に排水用の溝を掘削（～7/26）	8月29日 1区 川跡（SD08）掘削 多数の遺物出土 8月30日 1区・2区 空中写真撮影前の清掃・整備
7月26日 1区 遺構検出 1区 遺構掘削開始	9月1日 1区・2区 空中写真撮影・測量
8月4日 1区 奈良・平安時代の川跡（SD08）より木製皿出土 遺物出土状況撮影	9月2日 現地説明会開催 9月4日 2区 溝（SD20）掘削
8月8日 2区 遺構検出開始（～8/9 1/4完了）	9月5日 撤収作業完了 発掘調査完了
8月9日 2区 遺構掘削開始	9月6日 埋め戻し作業開始（金剛建設株式会社）



第1図 遺跡包蔵地範囲



第2図 発掘調査位置図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

近岡シタンダ遺跡は金沢市近岡町に所在する。

石川県は本州日本海側のほぼ中央に位置している。北方は日本海に面し、南方は福井県、岐阜県、富山県と接する南北に細長い県であり、日本海に突き出た能登地方とその南の加賀地方に分けられる。金沢市は加賀地方の北部に位置している。その西部は日本海に接し、南東部には海拔1,500mを越える山地をかかえる。この山地からは市域を西流する二大河川、浅野川と犀川が流れ、北側に位置する前者は河北潟へ、南側の後者は日本海へ注ぐ。河北潟はかつて石川県最大の面積をもつ潟であったが、現在では、2/3が干拓され農地となっている。市域の西部に展開する平野部では両河川に挟まれた地域に市街地が形成されている。また、犀川を境として、北部平野と南部平野に分かれ、前者は犀川・浅野川やその北部を流れる金腐川・森下川によって形成された沖積平野であり、後者は白山を源とする手取川が形成する扇状地の北辺である。

近岡シタンダ遺跡は、金沢平野の北西部に位置しており、大野川下流南岸の海拔1m前後を測る低地に営まれている。この近岡町は、北西方向約1kmには金沢港がひらけ、北方向約1.2kmには大野川、西方向約1.5kmには浅野川が流れている。当遺跡が立地する付近一帯は大野川、浅野川、犀川によって形成された沖積平野であり、近年は地下水の汲み上げ等に伴い地下水位が低下したが、古くは豊富な地下水の自噴地帯であった。また、かつては大野川の旧河道や中州、自然堤防が島状に分布し、田船で往来していたという。古くから集落形成に適しており、市内でも有数の遺跡密集地帯となっている。

第2節 歴史的環境

近岡町には、近岡シタンダ遺跡の他、近岡遺跡、近岡南遺跡、近岡ナカシマ遺跡、近岡カンタンボ遺跡、近岡テラダ遺跡、近岡B遺跡、近岡C遺跡が分布する。

縄文時代は、縄文時代晚期から始まる遺跡が多い。直江北遺跡からは土器がまとまって出土しており、直江中遺跡、直江ボンノシロ遺跡、直江西遺跡でも少量ながら土器が出土している。この他、戸水C遺跡、藤江C遺跡、無量寺金沢港遺跡でも土器が出土している。

弥生時代に入ると遺跡の分布は広がりをみせるようになる。前期では、戸水C遺跡、南新保三枚田遺跡、藤江C遺跡などで小集落が営まれている。

中期は、直江北遺跡や直江ボンノシロ遺跡、直江西遺跡、大友E遺跡で土坑や溝、川跡等から中期の遺物が出土している。戸水B遺跡、畠田遺跡では建物跡も検出されている。中期後葉になると遺跡数が急増する。特に、金沢平野臨海部の拠点集落である西念・南新保遺跡では、中期後葉の段階から平地式建物や方形周溝墓が確認され、環濠集落として古墳時代初頭まで存続する。近年の発掘調査により、南新保C遺跡では多数の住居跡、方形周溝、前方後方墳、円墳などが検出されており、弥生時



第3図 遺跡位置図

代中期から古墳時代中期にかけての大集落が営まれていたことが明らかとなっている。

後期には、近岡カンタンボ遺跡で溝が検出され、土器が出土している。青銅器の受容がこの頃からみられる。無量寺遺跡からは中国製の双頭竜文鏡を分割・加工した懸垂鏡が、大友西遺跡、西念・南新保遺跡から国産の小型鏡がいずれも溝から出土している。大友西遺跡で連鑄の銅鎌が、藤江B遺跡で中細形同県が出土している。大友西遺跡や戸水ホコダ遺跡では多くの竪穴式建物、掘立式建物がみつかっている。

終末期になると遺跡数がかなり増加する。近岡カンタンボ遺跡では大溝が検出されており、土器をはじめ木製の鋤や鍬などが出土している。近岡ナカシマ遺跡、近岡テラダ遺跡からは方形周溝墓、河川等が検出され、土器、木製品が出土している。

古墳時代は弥生時代終末期の集落から継続した遺跡が多い。近岡遺跡では古墳時代初頭の遺物が出土している他、近岡カンタンボ遺跡では中期の土器が出土している。前期の古墳については、前方後方墳が戸水C古墳群と南新保C遺跡で検出されている。玉造関連遺跡として大友F遺跡があげられる。剝貫円盤のほか石釧未成品、管玉未成品などが大量に確認されている。剝貫円盤はほかに大友西遺跡や藤江B遺跡、出雲じいさまだ遺跡、畠田・寺中遺跡からも確認されており、桜田・示野中遺跡では玉つくりの原料となる溶結凝灰岩の石核が多数出土している。古墳時代中・後期は遺跡が激減する。西部平野では畠田・寺中遺跡を中心とし、その周辺の犀川流域に後期の須恵器を少量出土する遺跡が広がっている。大友E遺跡でも後期の須恵器が定量みつかっている。

奈良・平安時には金沢平野において大きな集落が多数展開する。8世紀代の加賀地方は越前国に属し、加賀郡と江沼郡から成っていた。金沢平野は加賀郡北部に属す。平野西部には郡津関連の官衙遺跡が広がっており、海岸部近くでは、8世紀前半の大型掘立柱建物や7世紀代と考えられる木簡が確認された金石本町遺跡、「津」墨書や漆紙文書、大型掘立柱建物群が確認され、10世紀代に最盛期を迎える戸水C遺跡が展開する。また、「宿家」墨書土器が出土した戸水大西遺跡、大型掘立柱建物と漆紙文書、大量の墨書土器が出土した大友E遺跡、契丹や渤海を含む中国北部で製作された可能性が高い帶金具が出土した畠田ナベタ遺跡が存在しており、渤海使を安置した加賀の「便処」が想定される。畠田・寺中遺跡からは出拳木簡や郡符木簡が出土している。藤江B遺跡の「石田庄」墨書土器、西念・南新保遺跡の「庄」墨書土器など、古代荘園の管理施設が存在している。近岡ナカシマ遺跡からは大型掘立柱建物跡が検出されている。近年の発掘調査により、南新保C遺跡で9世紀代の長大な船材が見つかり、船関連施設の存在が推定されている。

中世の近岡は南北朝時代には加賀国石川郡倉月庄十六村（郷）の一部であった。近岡遺跡からは珠洲焼や越前焼、灯明皿、曲物製井戸枠が出土している。普正遺跡からは五輪塔や柿経、貿易陶磁が出土し、港湾施設が存在したことが考えられている。畠田西遺跡群や畠田・寺中遺跡からは条里溝とその区画内に多数の掘立柱建物や井戸が検出された。その他にも直江北遺跡からは建物跡や鳥帽子が出土した。直江南遺跡からは13世紀前半～14世紀前半頃の井戸や竪穴状遺構、直江西遺跡では14世紀と考えられる井戸が検出された。また、大友E遺跡からは区画溝や総柱建物、井戸が検出され、区画溝内からは鳥帽子が出土している。

〈参考文献〉

- 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター (2016)『金沢市大友A遺跡・大友E遺跡・直江西遺跡・直江北遺跡』
金沢市埋蔵文化財センター (1998)『金沢市文化財紀要144 近岡遺跡』
金沢市埋蔵文化財センター (2002)『金沢市文化財紀要186 近岡遺跡Ⅱ』
金沢市埋蔵文化財センター (2016)『金沢市文化財紀要305-1 大友A遺跡・大友D遺跡・大友F遺跡・大友G遺跡』



1 近岡シタンダ遺跡 (弥生～平安)	22 畠田・寺中遺跡 (縄文・古墳～中世)	43 藤江C遺跡 (縄文～中世)	64 二口六丁B遺跡 (弥生・古墳)
2 近岡B遺跡 (弥生)	23 畠田遺跡 (縄文～中世)	44 二ツ屋町遺跡 (縄文・弥生～中世)	65 二口六丁A遺跡 (弥生・古墳)
3 近岡C遺跡 (弥生～平安)	24 畠田大徳川遺跡 (奈良・中世)	45 松村西の城遺跡 (古墳・平安)	66 西念ネジタ遺跡 (弥生)
4 供田町遺跡 (弥生・古墳)	25 畠田B遺跡 (奈良・平安)	46 銀音堂遺跡 (弥生)	67 西念クボ遺跡 (縄文・古墳)
5 近岡カシタボ遺跡 (弥生・古墳・奈良)	26 畠田C遺跡 (弥生～平安)	47 松村平田遺跡 (弥生)	68 二口シミズ遺跡 (弥生・古墳)
6 近岡遺跡 (縄文～古墳・平安)	27 無量寺D遺跡 (弥生・奈良)	48 松村寺の前遺跡 (室町)	69 二口町遺跡 (弥生・古墳)
7 戸水C遺跡 (縄文～平安)	28 無量寺C遺跡 (奈良・平安)	49 松村A遺跡 (縄文・古墳・中世)	70 駅西本町一丁目遺跡 (弥生)
8 近岡カシマ遺跡 (弥生～平安)	29 畠田・無量寺遺跡 (奈良・奈良・平安)	50 松村寺のまえ遺跡 (弥生)	71 北安江遺跡 (弥生～江戸)
9 近岡南遺跡 (弥生・平安・中世)	30 畠田八ヶ夕遺跡 (奈良・平安)	51 桂遺跡 (弥生・中世)	72 木ノ新保遺跡 (江戸)
10 近岡ラダ遺跡 (弥生・平安・中世)	31 戸水大西遺跡 (奈良・平安)	52 松村B遺跡 (縄文・弥生・江戸)	73 醒ヶ井町遺跡 (弥生・江戸)
11 直江北遺跡 (縄文～中世)	32 戸水木コダ遺跡 (弥生～平安)	53 松村高見遺跡 (弥生・奈良・平安)	74 磯部東遺跡 (縄文～古墳)
12 直江中遺跡 (縄文・平安・中世)	33 大友西遺跡 (弥生～中世)	54 藤江B遺跡 (弥生～平安)	75 磯部運動公園遺跡 (弥生)
13 直江西遺跡 (弥生・古墳・中世)	34 戸水・大友遺跡 (弥生・平安・中世)	55 藤江A遺跡 (平安)	76 勝願寺跡 (中世)
14 直江二シヤ遺跡 (古墳～江戸)	35 南新保北遺跡 (弥生)	56 桜田・示野中遺跡 (弥生～平安)	77 磯部カシダ遺跡 (古墳・平安～江戸)
15 直江ボンノシロ遺跡 (弥生・奈良・平安)	36 南新保E遺跡 (弥生～中世)	57 出雲じいさまだ遺跡 (弥生～室町)	78 冲町B遺跡 (弥生・古墳)
16 直江南遺跡 (奈良・平安)	37 南新保C遺跡 (弥生・古墳)	58 北町北遺跡 (弥生)	79 久昌寺 (江戸)
17 大友A遺跡 (弥生～室町)	38 南新保三枚田遺跡 (弥生・古墳)	59 北町遺跡 (縄文・弥生)	80 無量寺金沢港遺跡 (縄文～古墳)
18 大友D遺跡 (弥生・奈良・平安)	39 南新保B遺跡 (弥生・古墳)	60 薬師堂遺跡 (弥生～平安)	81 無量寺B遺跡 (弥生・古墳)
19 大友E遺跡 (弥生～室町)	40 南新保B遺跡 (弥生)	61 若宮遺跡 (室町)	82 無量寺遺跡 (弥生～室町)
20 大友F遺跡 (弥生～室町)	41 畠田御台場跡 (江戸)	62 西念・南新保遺跡 (弥生～平安)	83 桂町南遺跡 (中世)
21 大友G遺跡 (弥生～平安)	42 戸水B遺跡 (弥生～平安)	63 西念東遺跡 (弥生)	

第4図 遺跡分布図

第3章 検出遺構

概要

1区では、耕作土（表土）の下に暗灰褐色粘質土の堆積層が約0.8mの厚さで堆積していた。堆積土には遺物が含まれず、調査区全体に堆積していたため、遺構を確認できる面まで重機により掘削を行った。1区で検出された遺構は、上部が削平されており、下部のみが遺存するような状況であった。しかしながら、1区東側で検出した溝2条については、検出面から0.4m～1.0mの深さがあり、多数の遺物が出土した。1区では、主に弥生時代中期～古墳時代前期の土坑、ピット、溝、古代の土坑、溝が検出された。古代については8世紀中～9世紀後半頃の遺構が見つかっている。

2区では、弥生時代終末～古墳時代前期の土坑、溝、古代の土坑、溝が見つかった。古代については8世紀後半～9世紀後半頃の遺構が見つかっている。弥生・古墳時代、古代の遺物が同量に出土しており、どの時代に帰属するのか判断が難しい遺構もある。

なお、紙幅の都合により、全遺構について詳細を述べることはできないため、主要な遺構について記述する。遺構の規模については断面図及び平面図を参照願いたい。

1区の遺構

ピット

P01（第8図） 長辺約0.84m、短辺約0.58m、深さ約0.12mのピットで、地山土を多く含む褐灰色粘質土が堆積する。小片のため詳細な時期の特定は難しいが、弥生時代終末期～古墳時代前期に帰属するか。

P04（第8図） 長辺約1.5m、短辺約1.08m、深さ約0.25mのピット。断面を観察すると中央に黒褐色粘質土、その左右に地山土を多く含む黒褐色粘質土が堆積しており、柱穴のような印象を受けるが、浅いため柱穴かは定かではない。小片のため詳細な時期の特定は難しいが、弥生時代終末期～古墳時代前期に帰属するか。

土坑

SK01（第8図） 推定長辺約1.6m、短辺約1.3m、深さ約0.35mの土坑で、最下層には地山土を含む黒褐色粘質土が堆積し、断面方形を呈する。P16と堆積が類似しており、柱穴かと思われたが定かではない。断面の観察より、SD03及びSD06を切ると判断したが、掘削当初は遺構の輪郭を把握することができなかつたため、遺構の大きさ及び範囲は推定である。「屋」墨書き土器、口縁部内面に墨線のある8世紀末～9世紀前半頃の無台壺、9世紀後半頃の内面黒色土器が出土している。古墳時代前期の土器も出土しているが、遺構の時期は8世紀末～9世紀後半頃に帰属するものと考えられる。

SK02（第8図） 遺存部で約1.36m×約0.92m、深さ約0.16mの土坑で、最下層には地山土を含む黒褐色粘質土、その上に黒褐色粘質土が堆積する。小片のため詳細な時期の特定は難しいが、弥生時代終末期～古墳時代前期に帰属するか。

SK03（第8図） 遺存部で長辺約2.9m×約1.36m、深さ約0.16mの土坑で、上層には灰色中砂、中層～下層にはオリーブ黒色砂と粘質土の互層、最下層には荒砂が堆積しており、全体的に植物遺存体が多く混入する。複数の時期にわたって埋まったものと考えられる。SD08を切る。完掘後に地山土が崩壊したため、平面図は遺構の形状を正確に示していない。9世紀後半頃の須恵器、8世紀後半頃の赤彩土師器が出土している。弥生時代終末期の土器も出土しているが、8世紀後半～9世紀後半頃に帰属するものと考えられる。

溝

SD01 (第8図) 幅約1.0～1.9m、深さ約0.14mの不定形な溝で、黒褐色粘質土が堆積する。北西 - 南東方向に延び、北側は近代以降のカクランに壊され、南側はSD06に切られる。遺物の出土はないため、時期は不明。

SD03 (第8図) 幅約0.8m、深さ約0.2m、北東 - 南西方向に延びる溝で、黒褐色粘質土が堆積する。北側はSD07、南側はSK01に切られ、SD06との切り合い関係は不明。土器の出土はないため、時期は不明であるが、木製品が出土した。

SD06 (第8図) 遺存部で幅約1.5m、深さ約0.25mを測る。調査区南辺を東 - 西方向に延び、最深部は調査区外にある。東にいくにつれて浅くなり、消失する。黒褐色粘質土、灰黄褐色粘質土が堆積する。SD01、SD04を切り、SD03との切り合い関係は不明。15世紀代の青磁碗が出土している。図化していないが、陶磁器類の小片も出土しており、中世以降に帰属するか。

SD07 (第8図) 検出段階では、SD07とSD08は同一のものと考えていた。断面を観察したところ、植物遺存体を多く含む堆積層が東側で立ち上がる事が判明したため、2条の溝が切り合い関係にあると判断した。SD07は幅約2.7m、深さ約0.37mの緩い椀型の溝で、北西 - 南東方向に約8mにわたり検出した。植物遺存体を多く含む灰オリーブ色粘質土が堆積する。平行して延びるSD08を切る。8世紀後半～9世紀後半頃の須恵器、内面黒色土器が出土する。SD08と区別して掘削を行っていない箇所があり、その際の出土遺物には弥生時代後期～古墳時代初頭頃の土器が混入するが、純粹なSD07として取り上げた遺物の大半は8世紀後半～9世紀後半頃であり、当該時期に帰属するものと考えられる。木製品では、棒材、板材のほか、曲物円板が出土した。

SD08 (第8・9図) 溝の西肩を検出しており、最深部は東側調査区外にあるものと考えられる。SD07に切られる西肩は0.1m程度の非常に浅いものであったが、東にいくにつれ次第に深さが増していき、調査区東端で一段下がる。調査区東端では約1mの深さがある。肩の部分では、細砂と黄灰色の砂質土が堆積しており、深度のある部分では上層に植物遺存体を少量含む暗灰黄色シルト、中層に灰色細砂、下層に細砂が入る黒色粘質土が堆積する。中層の灰色細砂（第9図8層）から多くの遺物が出土した。SD08からは今回の調査で最も多くの遺物が出土している。出土遺物の時期は大きく分けて2時期あり、弥生時代中期～古墳時代前期と8世紀中葉～9世紀前半頃である。出土量としては弥生時代中期～古墳時代前期の方が多く、古代の遺物は完形に近いものも出土している。弥生時代中期～古墳時代前期の遺物としては、ヘラ記号のある弥生時代後期の壺、赤彩高壺装飾器台が特筆される。古代の遺物としては、墨書土器「前」・「真」、墨溜めと考えらえる壺が出土している。また、木製品の出土も多く、挽物の皿や棒材、板材が出土した。さらに、SD07出土の可能性もあるが、斎串も出土している。弥生時代中期～古墳時代前期の土器を混入と考えるには出土量が多く、長時間にわたって溝が存在していたものと考えられる。

2区の遺構

ピット

P16 (第9図) 推定長辺約0.9m、短辺約0.4m、深さ0.25mのピット。最下層には地山土を含む灰色粘質土が堆積し、断面方形を呈する。P04と堆積が類似する。断面の観察より、SD10に切られると判断したが、掘削時には遺構の輪郭を把握することができなかったため、遺構の大きさ及び範囲は推定である。遺物の出土はないため、時期は不明。

土坑

SK07 (第9図) 長辺約2.0m、短辺1.9m、深さ0.5mの土坑。ゆがみのある方形で、覆土は黄灰色シルトが入り、上方浅い広がりには黒褐色粘質土が堆積する。土坑の中央には一辺約0.15mの角材が垂直に埋め込まれており、その周囲からも杭状の木製品が複数突き刺さった状態で、覆土中には木片や

木枝が多く含まれる。古墳時代初頭頃の土器が出土するが、中央の角材は新しい印象があり、当時期に帰属するかは不明である。

SK08（第9図） 長辺約3.2m、短辺約2.5m、深さ約1.5mの大型の円形土坑は断面は椀型を呈し、南側では黒色粘質土、北側では地山土ブロックを多く含むオリーブ黒色粘質土の上に黄灰色粘質土が堆積する。掘り直しが行われたか。SD12を切り、SD17に切られる。黒色粘質土層中で編物状の植物纖維が出土したが、土と区別がつかないような状態で、取り上げることは困難であった。弥生時代終末期～古墳時代前期頃の細片、8世紀後半頃の須恵器2点、石製品が出土する。木製品では樹皮製品が出土した。

溝

SD10（第9図） 幅約1m、深さ約0.1mの溝で、黒褐色粘質土が堆積する。南北方向に延び、P16を切る。SD17との切り合い関係は不明。平面図上ではSD15と流路を同一にするように見えるが、両溝の堆積状況が異なるため、同一であるかは定かではない。

SD11（第9図） 幅約0.8m、深さ約0.1mの溝で、黄灰色粘質土が堆積する。南北方向に延び、SD17との切り合い関係は不明。溝底部は土坑状に凹凸がみられる。朱墨溜めの可能性がある8世紀末～9世紀前半頃の須恵器有台坏、同時期の皿が出土している。古墳時代初頭頃の土器も出土しているが、細片であり、遺構の時期は8世紀末～9世紀前半頃に帰属するものと考えられる。

SD12（第9図・第10図） 幅約1.1m、深さ約0.25mの深い椀型を呈する溝で、黒褐色粘質土が堆積する。北西～南東方向に延び、約12mに渡り検出している。一部溝底部に小ピット状の凹凸が連なる箇所があり、覆土には細砂が入る。西側はSD14、東側はSD15が並行するが、両溝を切っており、SD12が最も新しい。北側ではSK08、SD17に切られる。弥生時代終末～古墳時代前期の土器の他、8世紀後半頃の「#（ドーマン）」墨書土器、長頸瓶、土錘が出土する。8世紀後半～9世紀初頭頃の須恵器が出土するSD14を切っているので、8世紀後半以降の溝であると考えられる。

SD14（第10図） 幅約0.7m～約1.3m、深さ0.1m～0.2mの溝で、オリーブ黒色砂質土が堆積する。SD12、SD15と並行し北西～南東方向に延びるが、南側は一段深くなり、堆積の様相も異なるため、南側をSD21とした。SD12に切られ、SD15との切り合い関係は不明。主に8世紀後半～9世紀初頭頃の須恵器が出土した。

SD15（第10図） 幅約1.3m、深さ0.2mの溝で、鉄分を多く含み黄褐色化した細砂が堆積する。SD12、SD14と並行し北西～南東方向に延びる。SD12に切られ、SD14との切り合い関係は不明。古墳時代初頭頃の土器細片が大量に出土した。

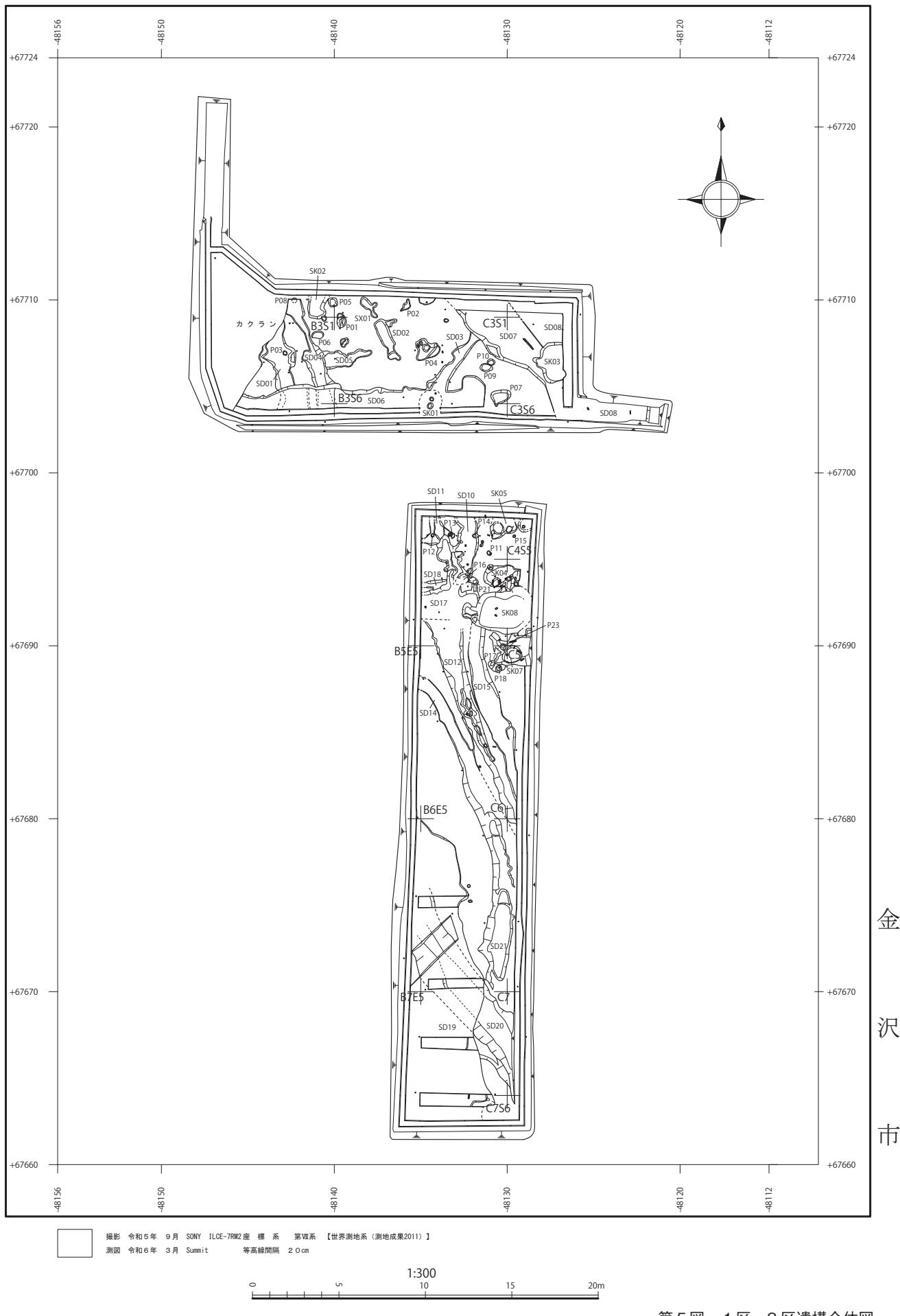
SD17（第10図） 幅約1.6m、深さ0.2mの溝で、黒褐色粘質土が堆積する。東西方向に延び、SK08、SD12、SD18を切る。SD12との覆土の違いが明確でないため、区別して掘削することが難しく、南岸のラインは推定である。9世紀前半の「十」か「大」かと考えられる墨書土器の他、弥生時代終末～古墳時代前期の土器細片が出土する。

SD19（第10図） 調査区内で幅約4.0mを検出しており、西岸は調査区外にあり検出していない。黄灰砂質土、細砂が堆積しており、近代以降の川跡と考えられる。溝は北西～南東方向に延び、深さは約0.5mである。

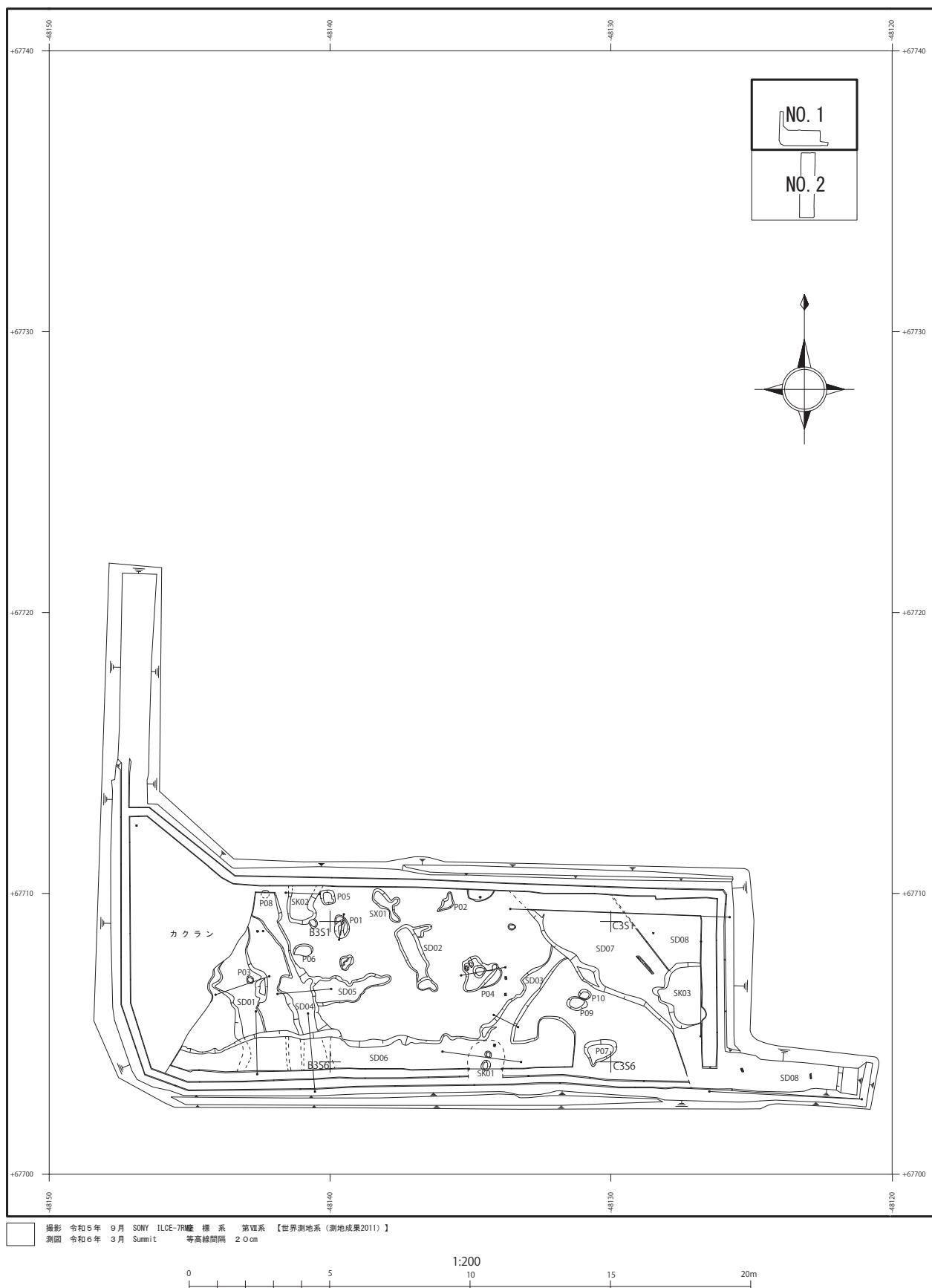
SD20（第10図） 幅約2.4m、深さ約0.95mの断面椀型の溝で、黒褐色粘質土が堆積する。北西～南西方向に延び、SD19、SD21に切られ、両溝より古い。遺物の出土はほとんどなく、時期は不明である。

SD21（第10図） SD14の流路を引き継ぐが、一段深くなり、堆積がSD14とは異なる様相を示す南側についてSD21とした。幅約1m、深さ0.4mの断面逆台形状の溝で、上層には黒褐色粘質土、下層には褐灰色砂質土が堆積する。溝底より水が湧き出る状態で、地山土が大変ゆるく、完掘直後の底部の形態を保つことが困難であった。平面図は遺構の深さ及び形状を正確に示していない。北西～南東方向に延び、SD20を切る。古墳時代前期頃の土器、古代の長頸瓶底部が出土した。

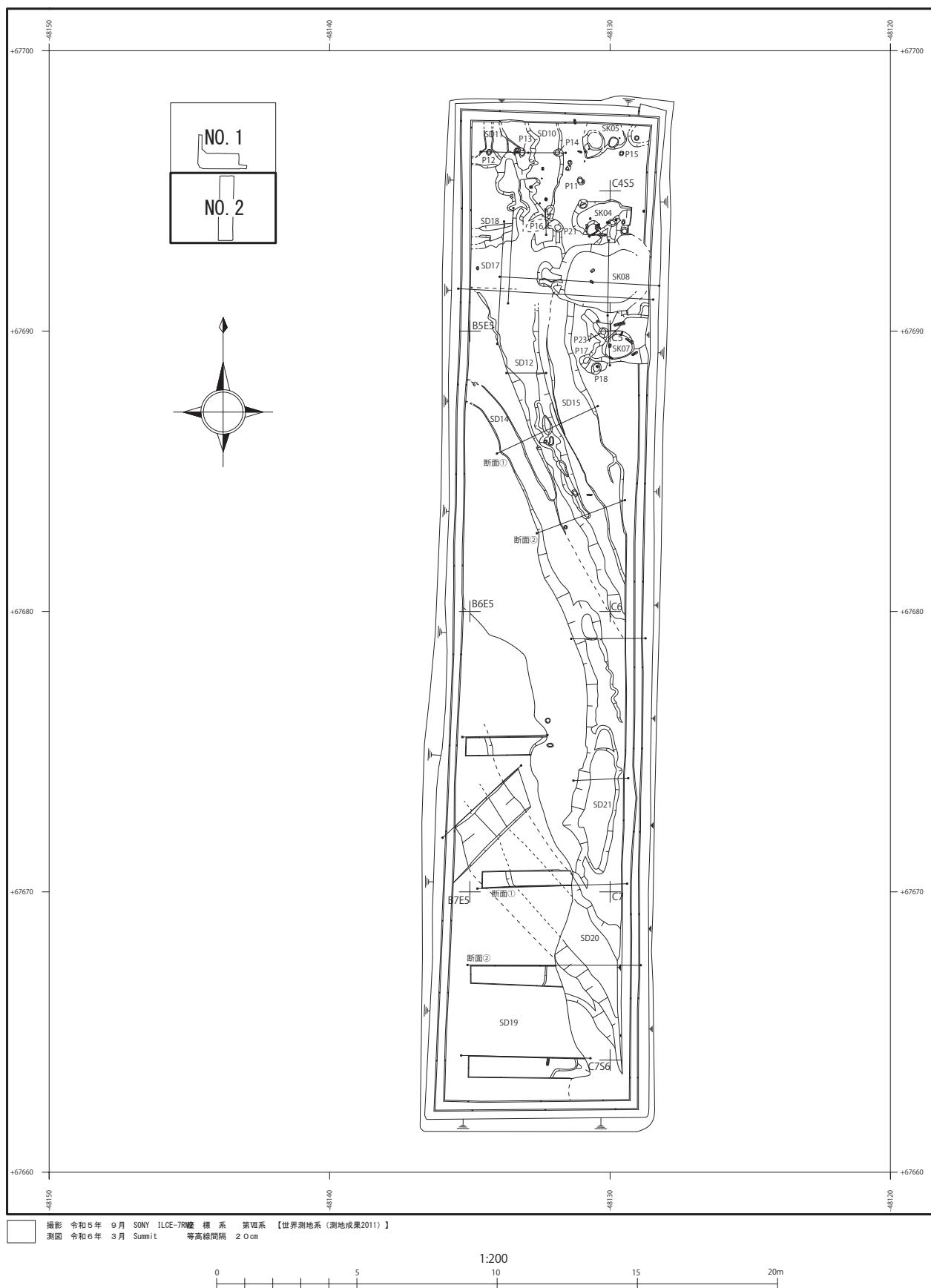
2023



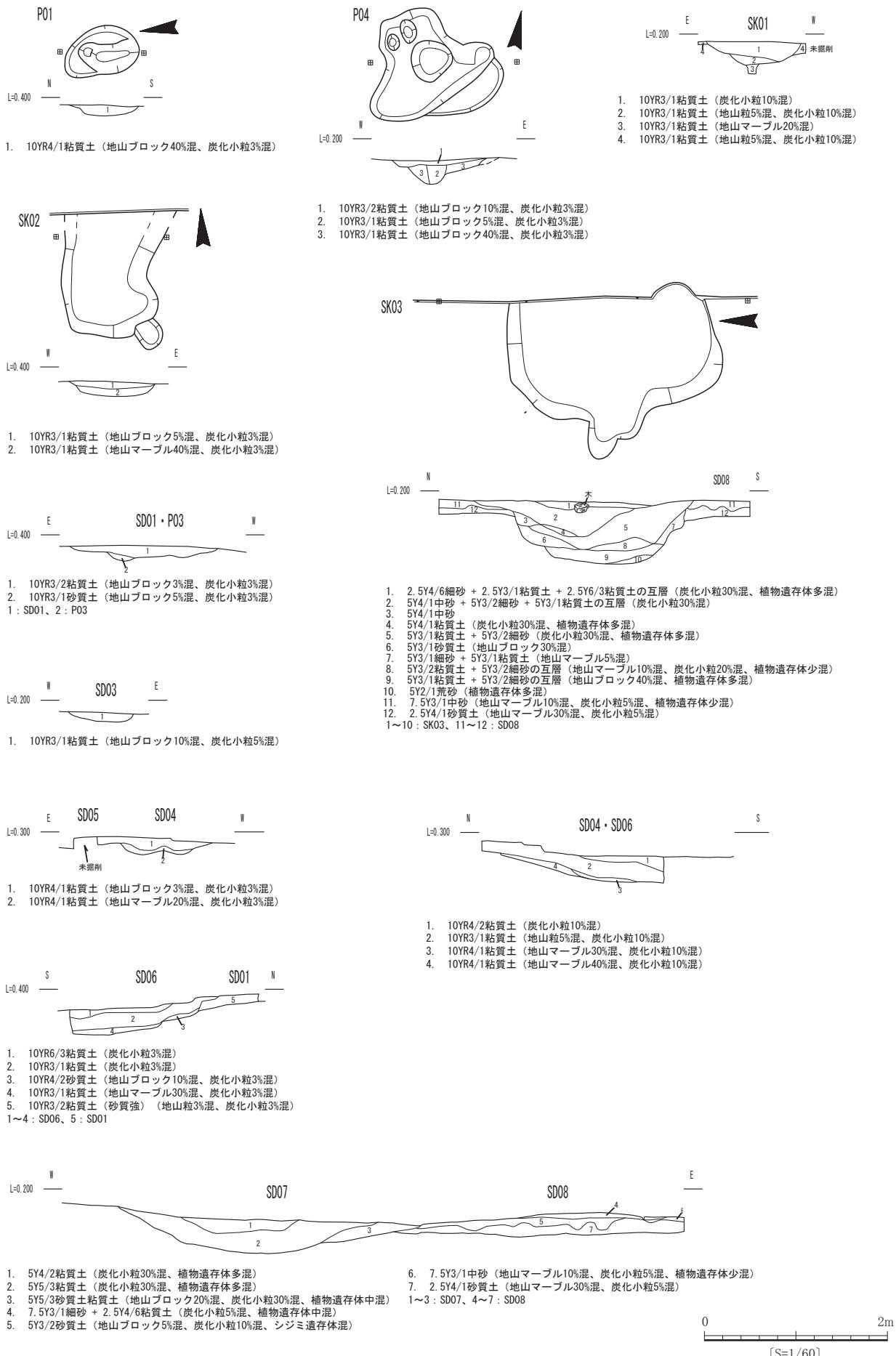
第5図 1区・2区遺構全体図



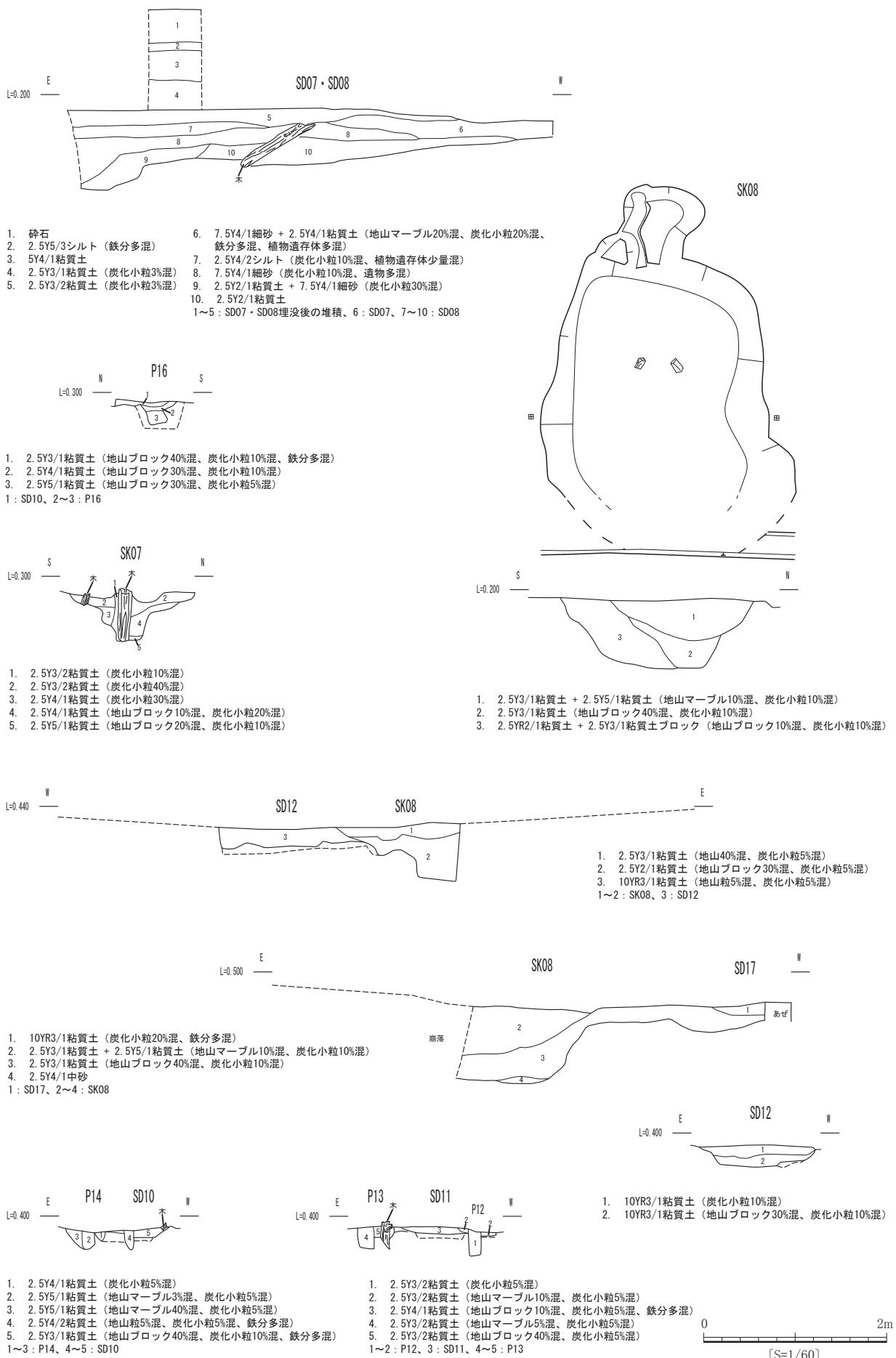
第6図 1区 遺構全体図 ($S = 1/200$)



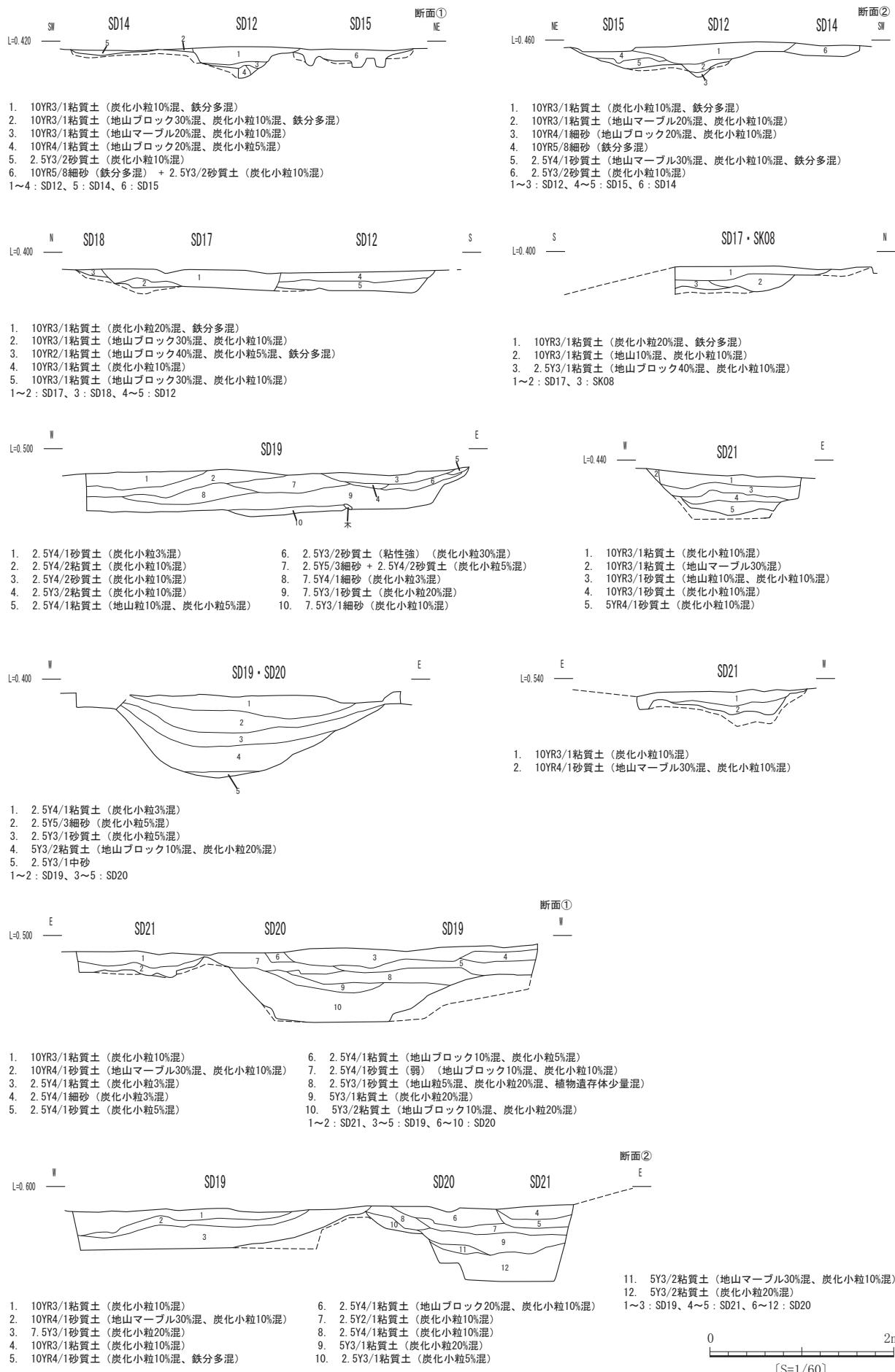
第7図 2区 遺構全体図 (S = 1/200)



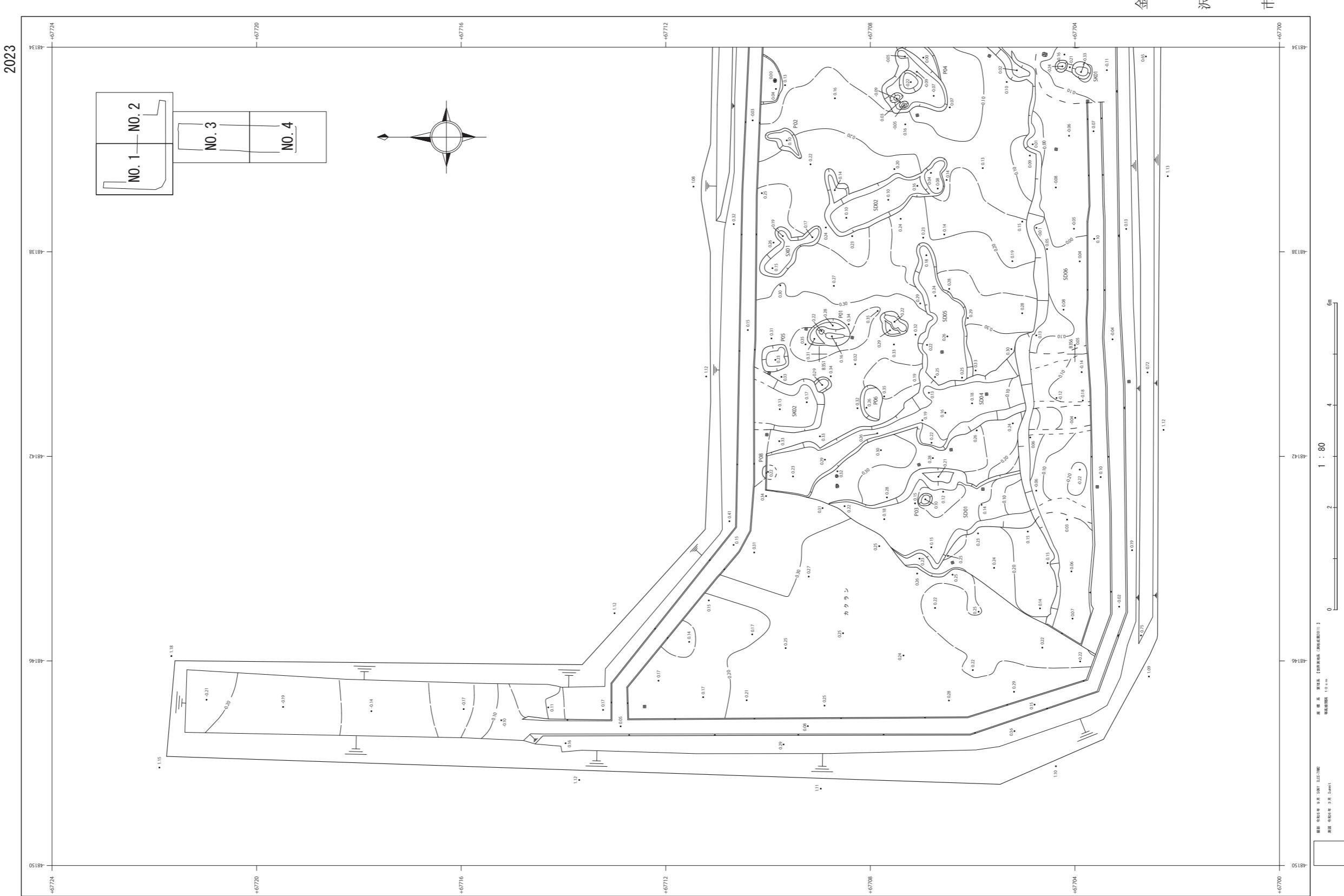
第8図 1区 P01、P04、SK01、SK02、SK03、SD01・P03、SD03、SD04・SD05、SD04・SD06、SD01・SD06、SD07・SD08 (S = 1 / 60)



第9図 1区 SD07・SD08、2区 P16、SK07、SK08・SD12、SK08・SD17、SD10、SD11、SD12 (S=1/60)

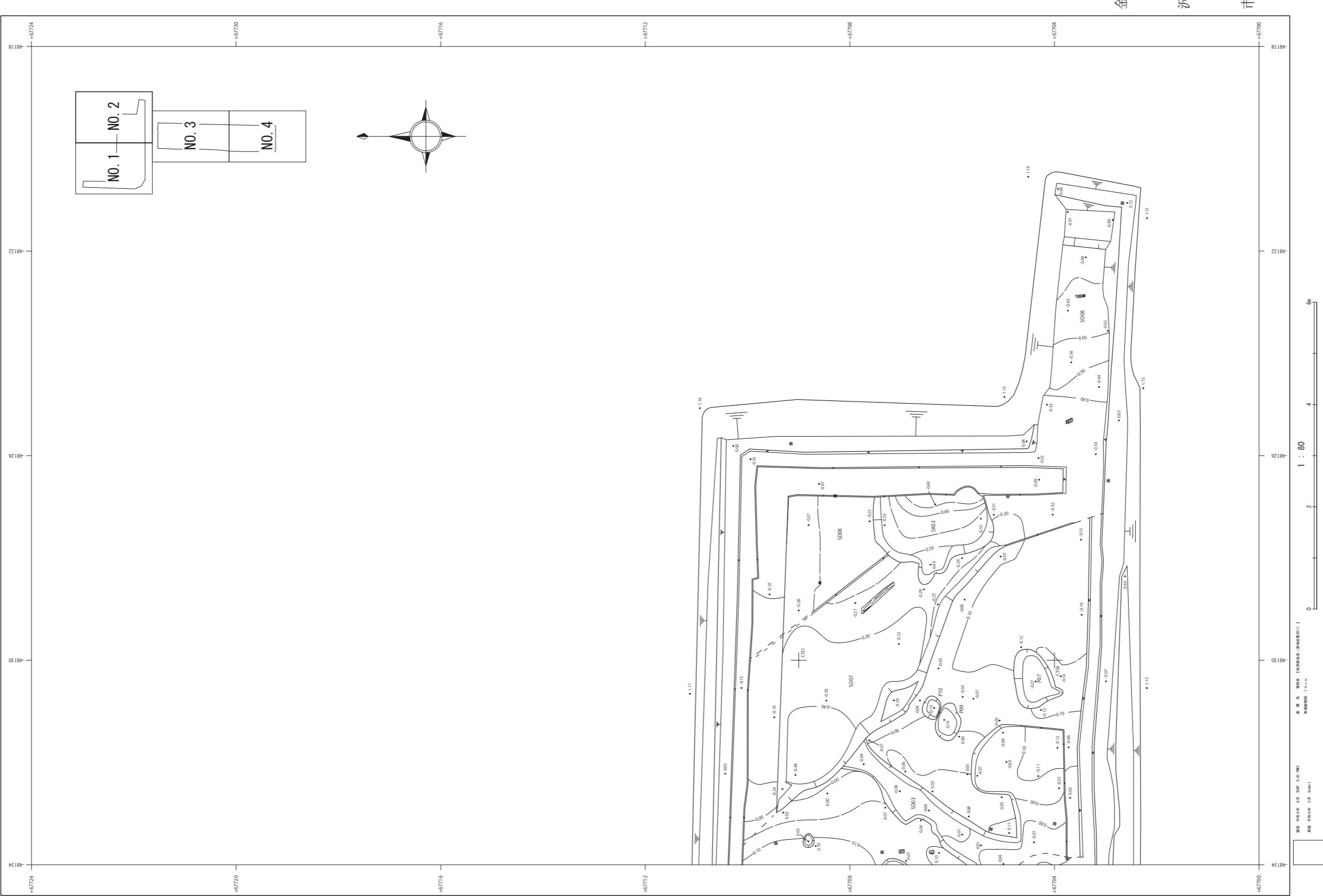


第10図 2区 SD12・SD14・SD15、SD12・SD17・SD18、SK08・SD17、SD19・SD20、SD19・SD21、SD19・SD20・SD21 (S = 1 / 60)

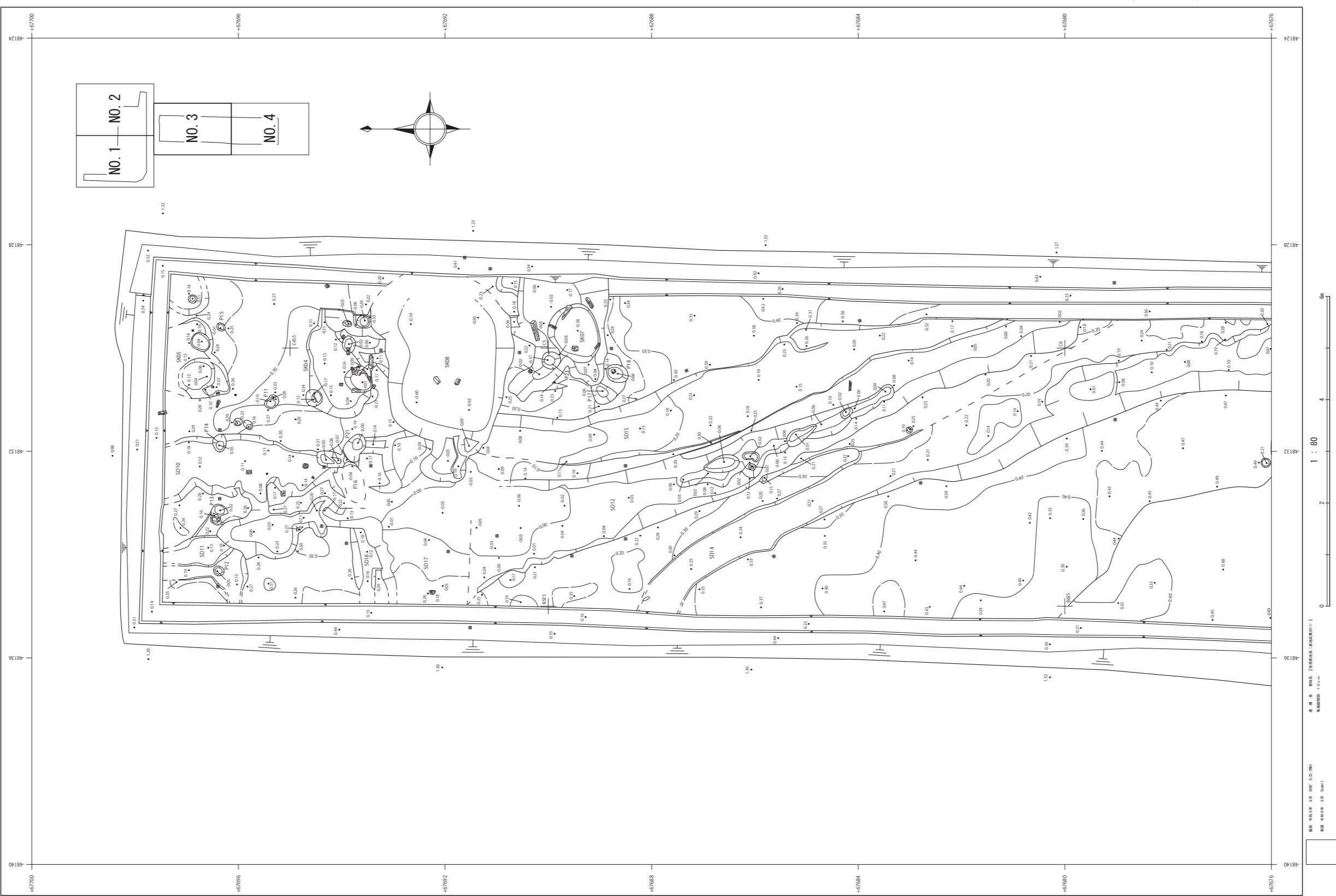


第11図 1区 平面図 No.1 (S=1/80)

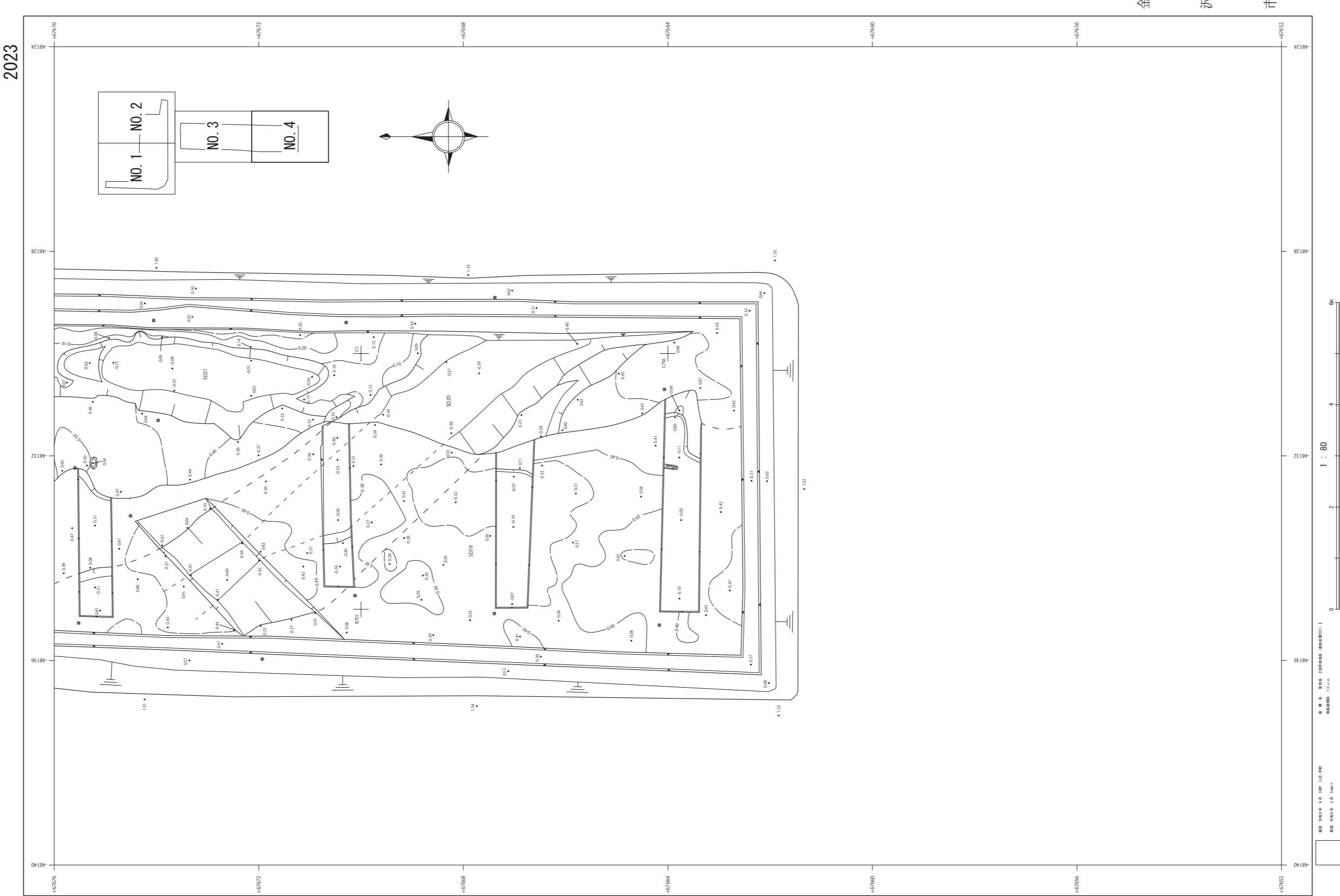
2023



2023



第13図 2区 平面図 No.1 (S = 1 / 80)



第14図 2区 平面図 No.2 (S=1/80)

第4章 出土遺物

概要

本遺跡では、大きく分けて弥生時代終末～古墳時代前期、古代、中世の遺物が出土している。古代の遺物の大半は8世紀後半～9世紀代のものである。墨書き土器、墨痕のある土器が多く、出土量に比して墨書き土器の比率が高いといえる。紙幅の都合により、遺構の年代を示すものや特殊なものなどをそれぞれの遺構で抽出しており、掲載資料は出土遺物の一部となってしまったことをご容赦いただきたい。分類及び年代観については、下記各論考を参照している。

【古墳時代】 田嶋（1986）漆町編年

【古代】 田嶋（1988）編年、出越（1997a・1997b）

1区の出土遺物

土坑

SK01（第15図1～4） 1は高松窯産の須恵器無台坏で、細片のため時期不明。底部外面に「屋」が墨書きされる。墨書きされた「屋」の上部は欠損するため、「屋」単体となるか、熟語となるかは不明。2は高松窯産の須恵器無台坏で、V期（8世紀末～9世紀前半頃）に比定。口縁部内面に幅0.7cmほどの1条の墨線がまわる。使用痕なのか底部内面の器面は擦れて滑らかになっている。3は土師器内面黒色無台椀で、9世紀後半頃に比定。ミガキは粗い。4は土師器壺の口縁部で、口縁帶に1単位3本の棒状浮文を施す。東海・近江系の系譜をもち、漆町編年7～8群頃（古墳時代前期頃）に比定される。

SK03（第15図5～8） 5は有段口縁甕で、月影式の新段階（弥生時代終末期頃）に比定される。6は高松窯産の須恵器坏蓋で、VI期頃（9世紀後半頃）に比定される。内面には煤付着あるいは墨痕がみられる。7は高松窯産の須恵器無台坏で、細片のため時期不明。8は赤彩土師器で、高台部分は欠損しているが、底部縁辺に面取りがみられることから、有台坏と考えられる。8世紀後半頃のものと考えられる。

溝

SD06（第15図9～10） 9は土師器壺の口縁部で、先端に断面三角形の口縁帶を作り出し、1単位3本の棒状浮文及び竹管押捺文を施す。東海・近江系の系譜をもち、漆町編年7～8群頃（古墳時代前期頃）に比定される。10は龍泉窯系青磁碗で、外面に線描連弁文が施されるものと考えられる。釉は豊付、高台内部は削り取り、体部外面に被熱痕がみられる。15世紀代のものか。

SD07（第15図11～24） 11は高松窯産の須恵器無台坏で、V2～VI期頃（9世紀代）に比定される。12は高松窯産かと考えられる須恵器有台坏で、VI期頃（9世紀後半頃）に比定される。底部外面に墨痕がみられ、筆ならしかと考えられる。13は須恵器甕か。内面に炭化物付着。14は末窯産の土師器内面黒色無台椀で、外面赤彩を施す。8世紀後半頃に比定される。15・16は土師器内面黒色無台椀、17は内面黒色有台椀。15～17は9世紀後半頃に比定される。18は土師器甕で、細片のため時期不明。内外面に煤付着。SD07はSD08と切り合い関係にあり、19～24は、SD08の遺物も含まれる可能性がある。19は有段口縁甕で、頸部内面にケズリ調整がみられる。法仏式（弥生時代後期）に比定される。20は大型の有段口縁甕で、頸部内面にケズリ調整がみられる。漆町編年5・6期（古墳時代初頭頃）に比定される。21は土師器高坏で、脚部に3箇所の円孔をもつ。漆町編年7・8期（古墳時代前期頃）に比定される。22は土師器蓋で、漆町編年5・6期（古墳時代初頭頃）に比定される。23は高松窯産の須恵器坏蓋で、V期（9世紀前半頃）に比定される。24は高松窯産の須恵器無台坏でV1期（8世紀末～9世紀前葉頃）に比定される。

SD08（第16図1～25、第17図1～6） 第16図1は有段口縁甕で、口縁部外面に擬凹線、口縁部内面に指頭圧痕がみられる。月影式（弥生時代終末期頃）に比定される。2は有段口縁甕の口縁部で、口縁下端にするどい稜をもち、山陰系の影響を受けるか。3は土師器甕か。器厚が厚く、工具痕がは

つきりと見えるぐらい調整が粗い。2、3は漆町編年5・6群（古墳時代初頭頃）に比定される。4は弥生時代中期頃の壺で、口縁端部にハの字状の刺突文を施す。5は弥生時代後期頃の壺である。口縁部に下から上へとのばした4本のヘラ記号がみられる。同様のヘラ記号は西念・南新保遺跡でもみられる。6は有段口縁壺。7は土師器壺で、外面はミガキ調整、煤付着がみられる。8は土師器壺で、口縁部外面に擬凹線、棒状浮文を施す。6、7、8は漆町編年5・6群（古墳時代初頭）に比定される。9は有段口縁壺で、口縁部外面に棒状浮文を施し、2対確認できる。古墳時代前期のものと考えられる。10は高坏で、外面に線状に煤がつく。11は赤彩高坏か、月影式期（弥生時代終末期）に比定される。12は器台脚部で、外面に赤彩が施される。13は高坏の脚部で有段になるか、細い線描で並行横線文、斜行短線文を施す。14は赤彩装飾器台。10、12は漆町編年5・6群（古墳時代初頭）、11、13は月影式期（弥生時代終末期）に比定される。第16図15～23、第17図1～5は須恵器である。第16図15～17は高松窯産の坏蓋。15は焼成時に酸化還元が不十分であり、赤色化する。15はIV2期頃（8世紀後半頃）、16は9世紀前半頃、17はV2～VI期（9世紀代）に比定される。18～21は高松窯産の坏無台坏。18はIV2期（8世紀後半頃）に比定される。19はV1期（8世紀末～9世紀初頭頃）、20はV2～VI1期（9世紀前半頃）、21はV2～VI1期（9世紀前半頃）に比定される。22は無台坏で、底部外面に墨痕がみられ、V2～VI1期（9世紀前半頃）に比定される。23は高松窯産の有台坏で、IV2～V1期（8世紀後半～9世紀初頭頃）に比定。24は古代の土師器甕の底部。25は無台坏で底部外面に墨痕がみられ、筆ならしと考えられる。IV2～V2期（8世紀後半～9世紀前半頃）に比定。第17図1～5には、墨書、墨痕がみられる。1～3の底部外面には「前」が墨書される。3点は全て能美窯産と考えられ、1は無台坏でIV2期（8世紀後半頃）、2は有台坏でV期（8世紀末～9世紀前葉頃）、3はIV2期（8世紀後半頃）に比定。4は底部外面に「真」が墨書されており、高松窯産の有台坏でIV2期（8世紀後半頃）に比定。5は小松窯産の有台坏で、底部外面に墨痕がみられ、墨だめとして使用された可能性がある。IV期（8世紀中～後葉）に比定。6は土錘。

SD07・SD08（第17図7～10） 7は小型の鉢で、内面に炭化物が付着する。月影式期の新式（弥生時代終末～古墳時代初頭頃）に比定。8～10は須恵器。8は高松窯産の無台坏で、V2期（9世紀前半頃）に比定。9は高松窯産の有台坏で、VI2期（9世紀中葉頃）に比定。使用痕なのか内面は汚れており、底部外面には判読不明の墨書。10は有台坏で、底部内面に墨痕と線状に擦れた痕跡がみられる。転用硯か。IV2期（8世紀後半頃）に比定。

2区の出土遺物

土坑

SK04（第17図11～13） 11は有段口縁甕で、月影式期（弥生時代終末期）に比定される。12は末窯産の須恵器無台坏で、IV2期（8世紀後半頃）に比定される。13は古代の土師器甕の底部。

SK05（第17図14～16） 14～16は須恵器無台坏である。14は高松窯産でV2～VI2期（9世紀中頃）、15は高松窯産でIV2期（8世紀後半頃）に比定。16は無台坏で、内面は擦れて汚れがみられる。IV2（8世紀後半頃）に比定。

SK07（第17図17・18） 17は有段口縁甕で、口縁部外面には擬凹線、漆町編年5・6群（古墳時代初頭）に比定される。18は器台で脚部に3箇所の円孔をもつ。漆町編年5・6群（古墳時代初頭）に比定される。

SK08（第17図19・20） 19、20は高松窯産の須恵器無台坏。19はIV2期（8世紀後半頃）、20はIV2期（8世紀後半頃）に比定される。

溝

SD11（第17図21～23） 21は器台で脚部に3箇所の円孔をもつ。漆町編年6群（古墳時代初頭）に比定される。22は小松窯産の有台坏で、底部外面に赤色塗料がみられ、朱墨溜めの可能性がある。V期（8世紀末～9世紀前半頃）に比定される。23は末窯産の皿で、薄手で胎土はかたく締まる。V期（8世紀末～9世紀前半頃）に比定。

SD12（第17図24、第18図1～3） 24は布留系甕。1は土錘。2は須恵器無台坏で底部外面に「#（ド

ーマン)」が墨書きされている。高松窯跡か、IV2期(8世紀後半頃)に比定される。3は高松窯産の須恵器長頸瓶。

SD12・SD15(第18図4) 4は有段口縁甕で、擬凹線が施されるか。漆町編年5・6群(古墳時代初頭)に比定。

SD14(第18図5・6) 5は須恵器無台坏で、IV2期(8世紀後半頃)、6は高松窯産の有台坏でV1期(8世紀末~9世紀初頭)に比定される。6は器面にふくれがみられる。

SD15(第18図7~11) 7は有段口縁甕で、口縁部外面に擬凹線が施され、炭化物が付着する。8は有段口縁壺で、口縁部外面には擬凹線が施される。9は装飾器台で、身部体部のほか底部にも透孔がみられる。10は器台で漆町編年5~7群(古墳時代初頭~前期頃)に比定される。11は小型壺で外面赤彩か、7、8、9、11は漆町編年5~6群(古墳時代初頭頃)に比定される。

SD17(第18図12) 12は高松窯産の無台坏で、底部内面に墨痕、底部外面には墨書きがみられる。「十」か、「大」か。V2期(9世紀前半)に比定される。

SD21(第18図13~16) 13は有段口縁甕で、口縁部下端にするどい稜をもち、山陰系と考えられる。漆町編年6~7群(古墳時代前期頃)に比定される。14は甕で、漆町編年6~7群(古墳時代前期頃)に比定される。15は甕底部か。16は長頸瓶の底部で小松窯産か。外面に自然釉がかかる。

その他

遺構検出(第18図17) 17は高松窯産の無台坏で、底部内面及び体部外面に墨痕がみられる。底部外面には墨書きされるが、欠損しているため判読不明である。VI2期(9世紀中頃)に比定される。

表土除去(第18図18) 18は高松窯産の無台坏で、「依」が墨書きされる。V2~VI1期(9世紀前半頃)に比定。

石製品

SD08(第18図19) 19は敲石か、先端にすり減りがみられ、敲打痕かと考えられる。

SD07・SD08(第18図20) 20は砥石か。2面は欠損による破断面であるが、他4面は砥面である。

SD16(第18図21) 21は砥石か。凹凸が多いが、2面が砥面と考えられる。

木製品

SK03(第19図1) 1は杭材か。先端を尖らせる。

SK07(第19図2) 2は板材で、2mmと12mmの孔があく。

SD07(第19図3~8) 3は曲物円板で、側面に3個所の釘孔がみられる。1個所については木釘が残る。4は棒材で、丸棒状に加工しており、木口には別材をはめ込んだのか孔があけられる。5は棒材で上端は角棒状、下端丸棒状に加工されており、上端に煤が付着する。6、7は板材。8は棒材で断面方形の貫通孔があけられる。煤が付着しているか。

SD08(第19図9・10、第20図1~3) 9、10は挽物の無台皿で、白木作りである。1は棒材で先端を扁平に加工する。2は角材。3は板材で、釘のような金属片が未貫通の状態で埋め込まれている。

SD07・08(第20図4~6) 4、5、6は齊串か。しっかりとした厚みがあり、表面の調整も粗く凹凸が残る。5は両端を圭頭状につくり、薄板で両面を丁寧に調整し平滑化する。6は両端をそれぞれ一側面から鋭く斜めに切り落とす。片面は丸みを帯びるように加工する。

SK04(第20図7) 7は用途不明品で、端部を丸みの帯びた逆四字状になるように加工する。孔は3個所残るが、2孔1対の孔が横位にあり、裏面には綴じた痕跡がみられる。

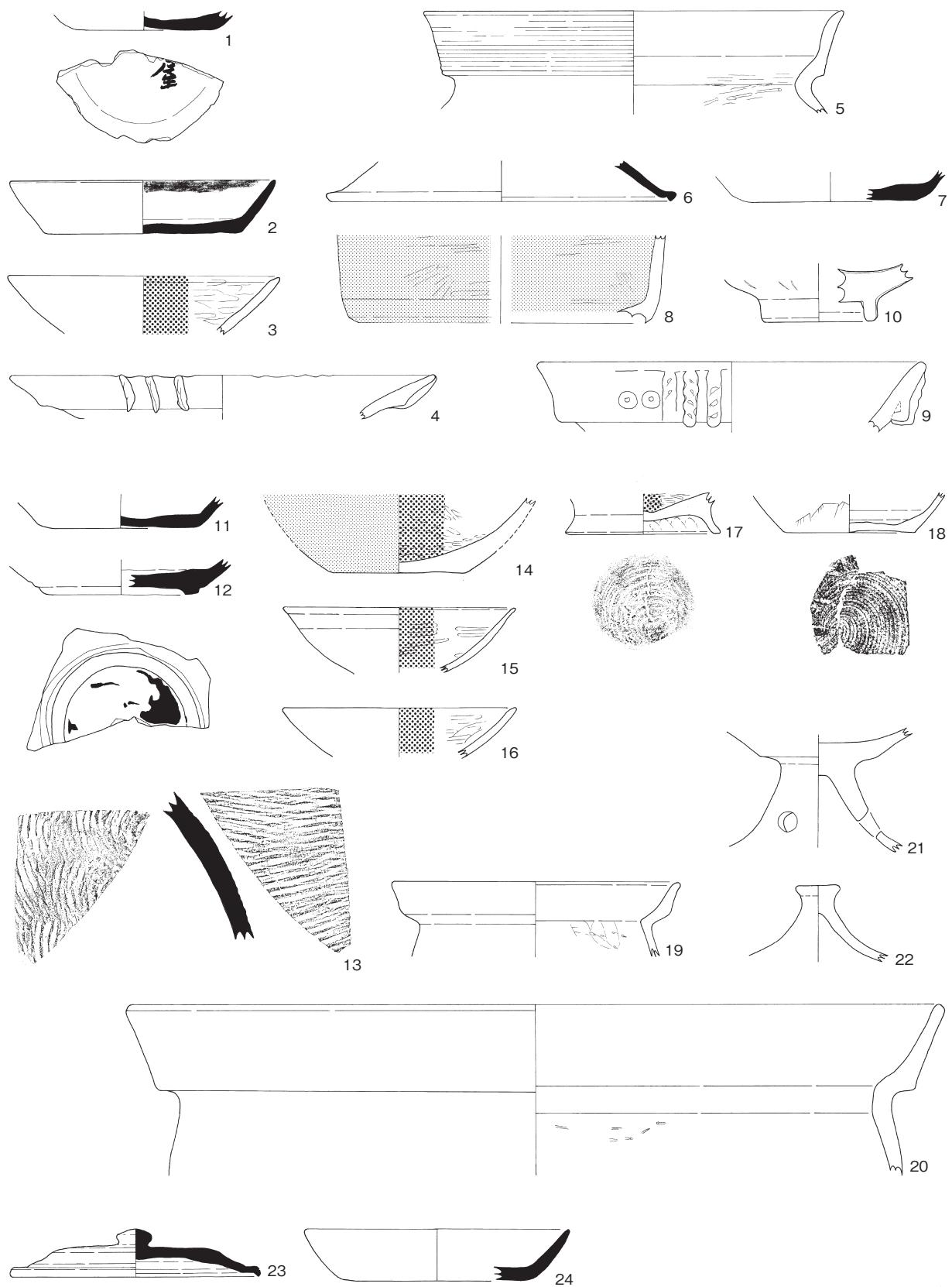
SD12(第21図1) 1は用途不明品で材は竹か。表面は磨かれ光沢がある。

SD16(第21図2) 2は樹皮製品で、幅約1cmの帯状の樹皮が巻かれた状態で出土。樹皮には2箇所に孔あり。

SD17(第21図3) 3は棒材で、丸棒状に丁寧な加工がされる。両端は切断されている。

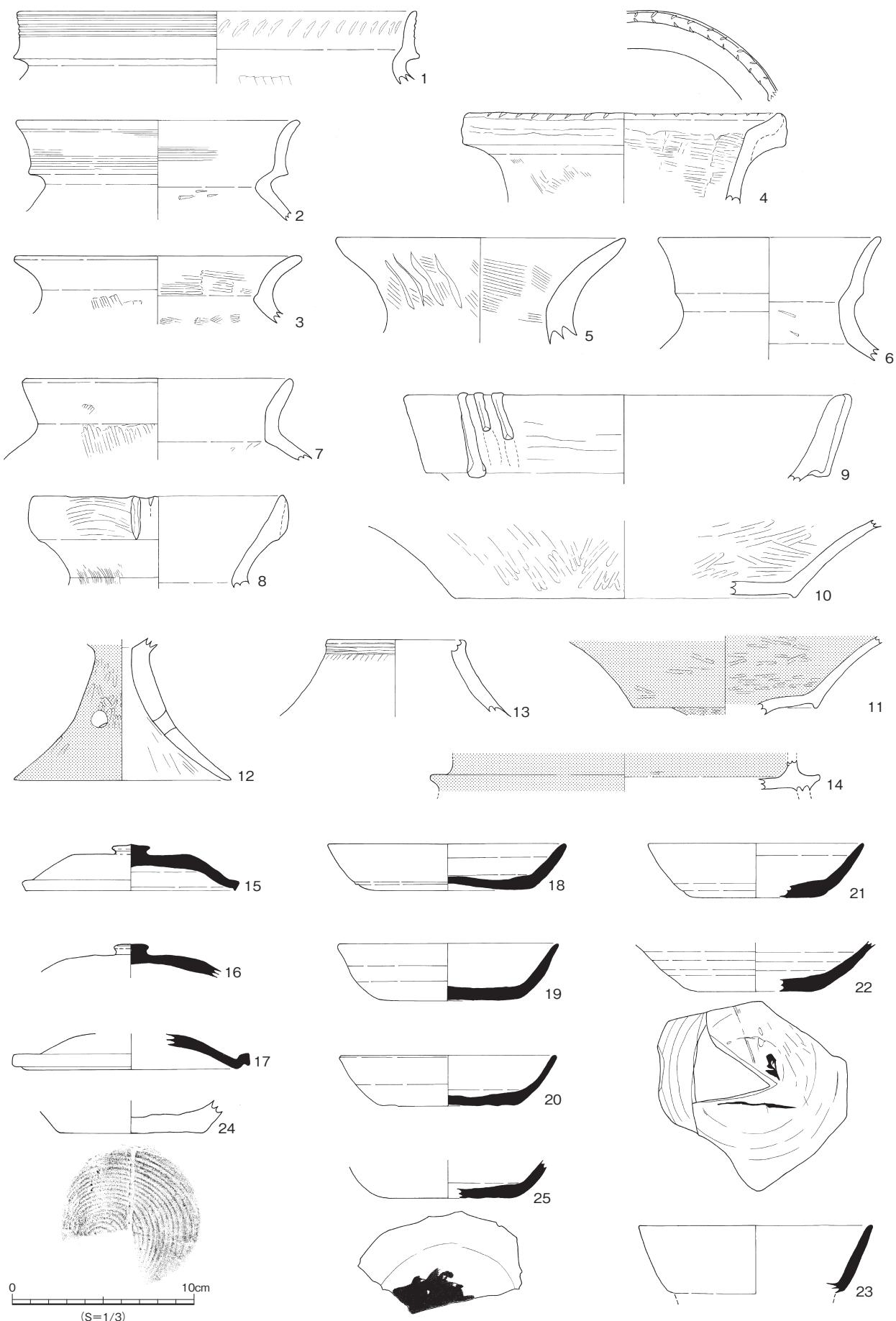
SD12・17(第21図4) 4は用途不明品で、先端をV字状に加工する。

SD19・20・21(第21図5・6・7) 5は用途不明品で、扁平な割材の一端を残していくびれ状に削る。立体人形の未成品などか。6は板材で、縦方向に抉りのある段をもつ。段の部分に方形の孔があけられる。7は板材。

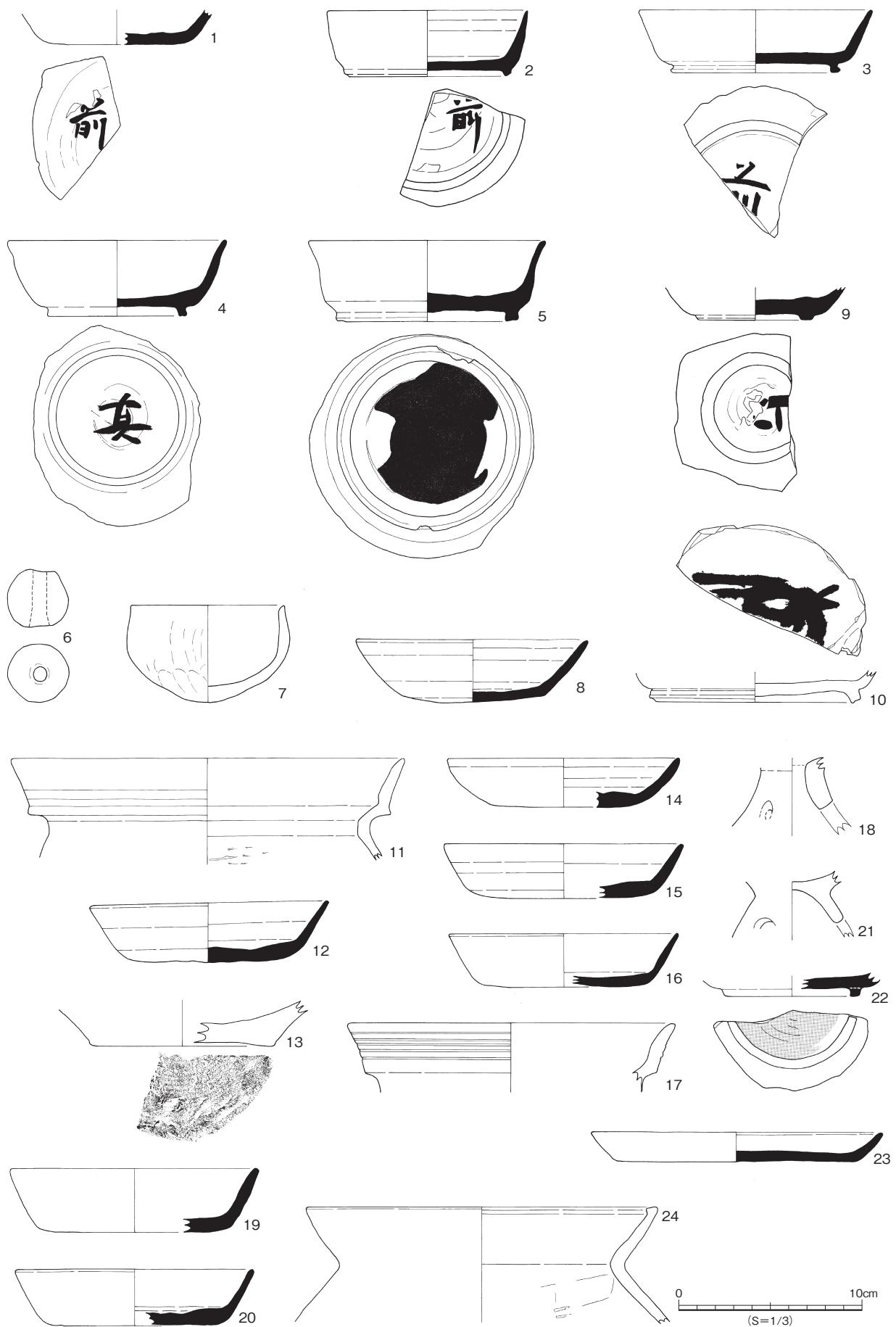


0 10cm
(S=1/3)

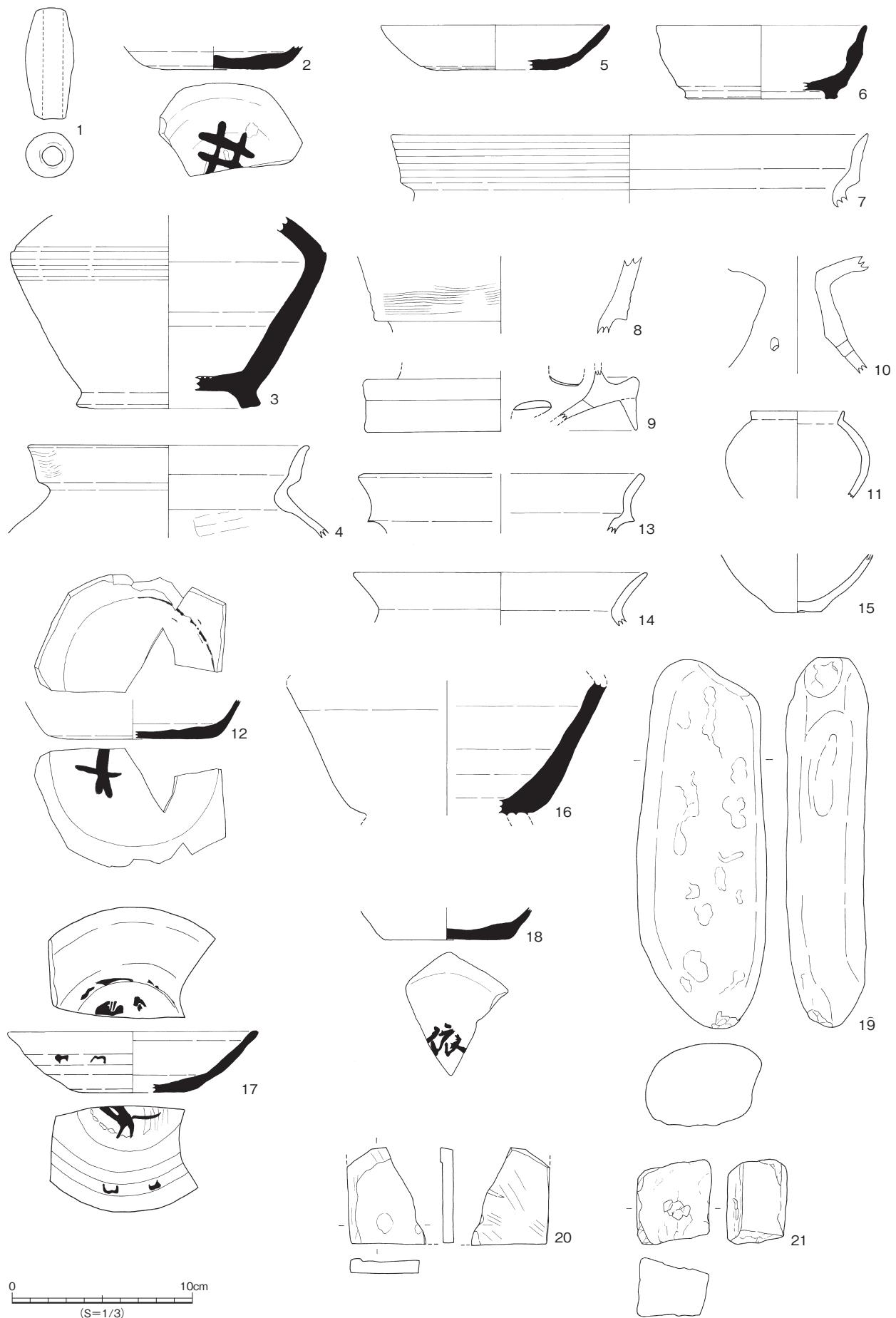
第15図 1区 SK01、SK02、SK03、SD06、SD07出土遺物 (S=1/3)



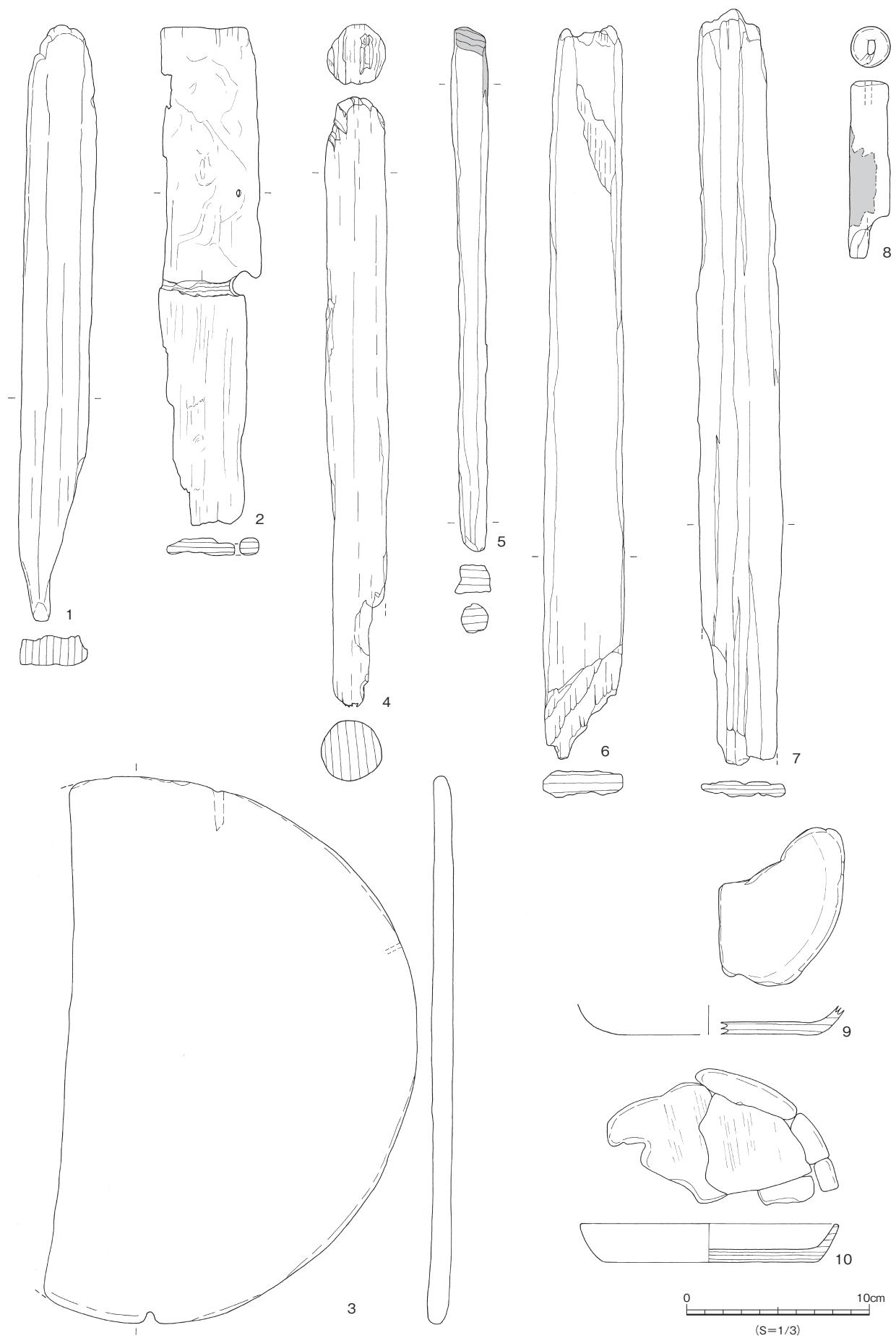
第16図 1区 SD08出土遺物 (S=1/3)



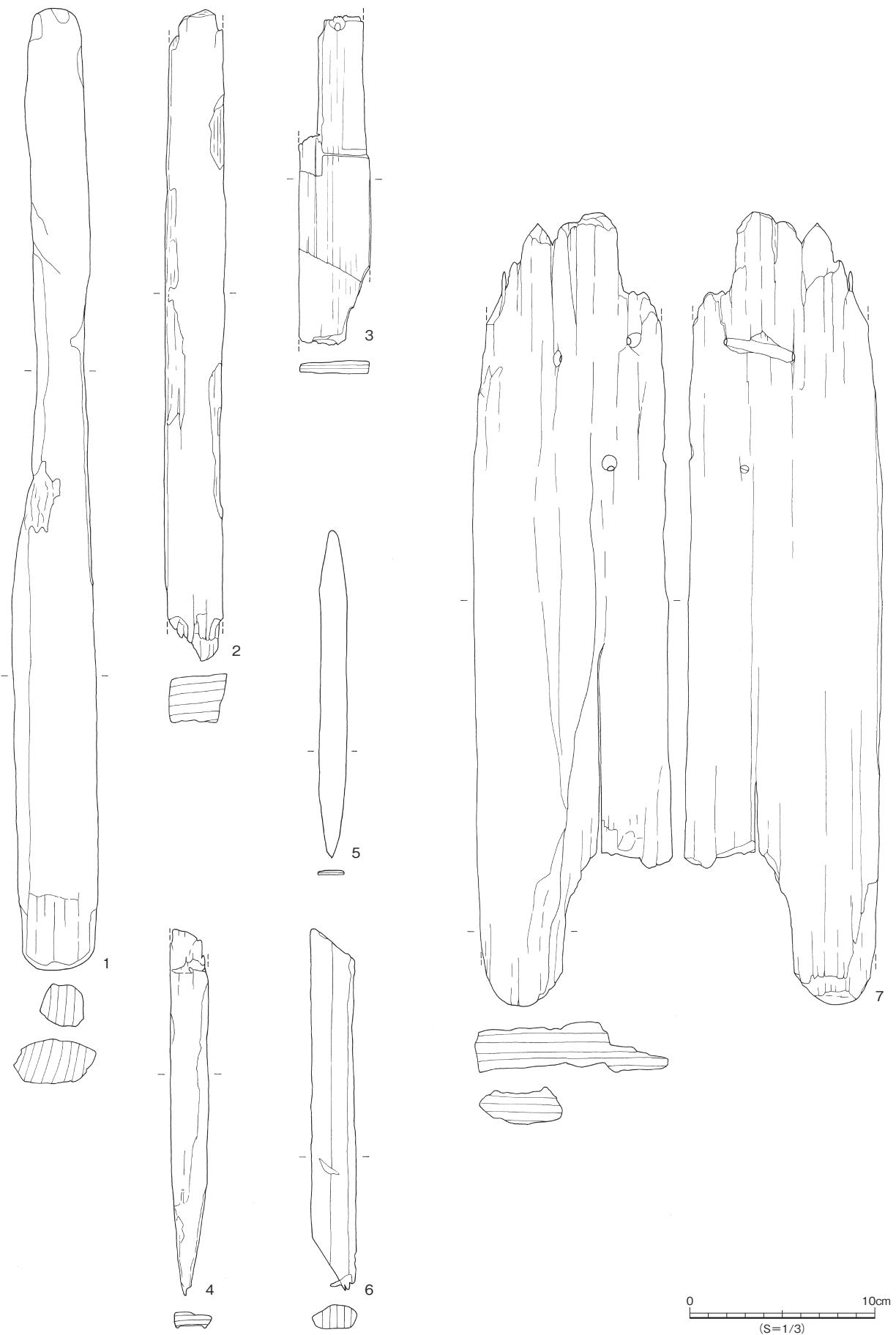
第17図 1区 SD08、SD07・08、2区 SK04、SK05、SK07、SK08、SD011、SD012、SD07 出土遺物 (S = 1/3)



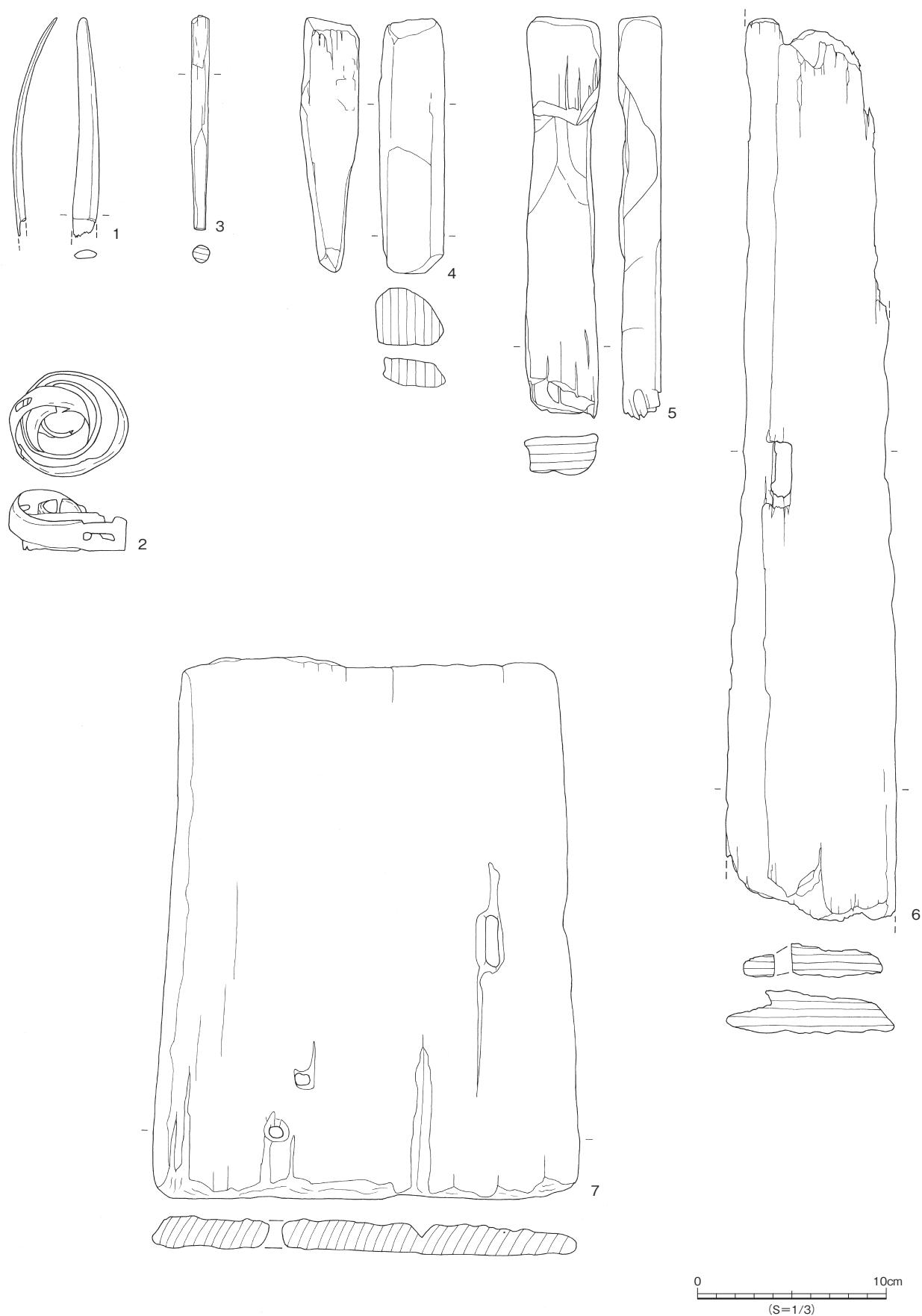
第18図 2区 SD12、SD12・15、SD14、SD15、SD17、SD21、遺構検出時、表土掘削時出土遺物、石製品 (S = 1/3)



第19図 1区 SK03、SK07、SD07、SD08 出土遺物 (S=1/3, 1/6)



第20図 1区 SD08、SD07・08、2区 SK04 出土遺物 (S = 1/3)



第21図 2区 SD12、SD16、SD17、SD12·17、SD19、SD19·20·21出土遺物 (S=1/2、1/3)

土器・陶磁器・土製品観察表

図版号	器類	造構	器種	法量(mm)				遺存度	胎土				調整				外色 (釉色調)	内面 (底地)	产地	備考	実測番号			
				口径 高 幅	器高 内底径	周厚	底径 受径		裕 裕 裕 裕	裕 裕 裕 裕	裕 裕 裕 裕	裕 裕 裕 裕	口縁外面	胴部外面	口縁内面	胴部内面	底部内面	底部外面						
15 1 1	SK01	須恵器 無台环	須恵器 無台环	(10)			90	底 3	△ ○	○	○	○					ロクロナデ	ヘラ切	5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	高松	墨書「屋」	1	
15 2 1	SK01	須恵器 無台环	須恵器 無台环	135	27			94	底 3	△ ○	○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			回転ヘラ切	2.5Y7/1 灰白色	2.5Y7/1 灰白色	高松	V (8C末~9C前半)	55	
15 3 1	SK01	土師器 無台輪	土師器 無台輪	140	(30)			小片	△ △	○	○	ナデ ²	ナデ ²	ヨコナデ ²	ミガキ				10YR6/2 灰黃褐色	10YR2/1 黑色		内面黒色 9C後半頃	2	
15 4 1	SK01 SD06	土師器 壺	土師器 壺	216	(22)			口 1	○ ○	△ △	○	(摩滅)		(摩滅)				5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR5/4 にぶい赤褐色		口縁部に棒状浮文 古墳前期 (漆町 7~8群)	3		
15 5 1	SK03	土器 壺	土器 壺	216	(53)			小片	○ ○	○ ○	○	ナデ ²	ナデ ²	ハケ ケズリ				5YR6/4 にぶい橙色	5YR7/2 明褐灰色		擬凹線12条 弥生 終末(月影式)	4		
15 6 1	SK03	須恵器 壺蓋	須恵器 壺蓋	180	(21)			口 1	△	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					2.5Y5/1 黄灰色	2.5Y5/1 黄灰色	高松	V 1 (9C後半) 内面 に煤か墨の付着あり	7		
15 7 1	SK03	須恵器 無台环	須恵器 無台环	(15)			66	底 3	△	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					6N/6 灰色	6N/6 灰色	高松		6		
15 8 1	SK03	土師器 有台环	土師器 有台环	(45)			小片	○ △	△ ○		ハケ ミガキ	ハケ ミガキ					5YR6/6 橙色	5YR5/6 明赤褐色		赤彩土師器 8C後半	5			
15 9 1	SD06	土師器 壺	土師器 壺	96	(36)			口 1	○	○	ナデ ²		ナデ ²				2.5Y5/6 明赤褐色	7.5YR8/4 浅黄橙色		口縁部に棒状浮文 竹管押捺文 漆町 7 ~8群 古墳前期	9			
15 10 1	SD06	青磁 椀	青磁 椀	(29)			58	底 4		○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					10G7/1 明銀灰色	10G7/1 明銀灰色		線描連弁文か 被熱痕あり 15C代か	8		
15 11 1	SD07	須恵器 無台环	須恵器 無台环	(17)			80	底 6	△ ○	△	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	高松	V 2~VI (9C代)	14		
15 12 1	SD07	須恵器 有台环	須恵器 有台环	(18)			90	底 5	○ ○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ					2.5Y5/1 黄灰色	2.5Y6/1 黄灰色	高松	筆ならしか 底部墨痕 あり VI (9C後半)	10		
15 13 1	SD07	須恵器 壺蓋か	須恵器 壺蓋か	(77)			小片	△	○	平行タタキ		当て具痕					N5/5 灰色	N5/5 灰色		内面炭化物付着	11			
15 14 1	SD07	土師器 無台輪	土師器 無台輪	(39)			67	底 2	△	○	ケズリ	ミガキ	ミガキ				7.5YR6/3 にぶい橙色	7.5Y2/2 黒色	未	内面黒色椀 外面赤 彩 8C後半	15			
15 15 1	SD07	土師器 椀	土師器 椀	118	(34)			口 1	○ ○	△ ○	ロクロナデ	ロクロナデ	ミガキ	ミガキ			10YR6/3 にぶい黄 橙色	N2/2 黒色		内面黒色椀 9C後半	17			
15 16 1	SD07	土師器 椀か	土師器 椀か	120	(26)			口 1	○ ○	△ ○	ロクロナデ	ロクロナデ	ミガキ	ミガキ			2.5Y2/1 黒色	10YR7/3 にぶい黄 橙色		内面黒色椀 VI (9C 後半)	16			
15 17 1	SD07	土師器 有台椀	土師器 有台椀	(21)			78	底 12	○	○	ロクロナデ	ミガキ	ミガキ	糸切		10YR5/2 灰黃褐色	10YR1/7/1 黒色		内面黒色有台椀 VI ~VI 2分 (9C後半)	12				
15 18 1	SD07	土師器 壺	土師器 壺	(20)			68	底 1	△	○	ケズリ	ロクロナデ	ミガキ	糸切		10YR5/2 灰黃褐色	10YR3/1 黒褐色		内外面煤付着 内面 黒色土器	13				
15 19 1	SD07 (SD08 含む)	土器 壺	土器 壺	145	(38)			108	口 3	○ ○	○	ナデ ²	ナデ ²	ナデ ²	ケズリ			10YR8/2 灰白色	10YR7/2 にぶい黄 橙色		弥生後期か (法式)	24		
15 20 1	SD07 (SD08 含む)	土器 壺	土器 壺	414	(88)			364	小片	○ ○ ○ ○ ○	○	ナデ ²	ナデ ²	ナデ ²	ケズリ			10YR6/2 灰黃褐色	10YR6/2 灰黃褐色		古墳初頭 (漆町 5~6群)	23		
15 21 1	SD07 (SD08 含む)	土器 高环	土器 高环	(96)	(63)			(90)	頸 12	○ ○ ○	○	(摩滅)	(摩滅)	(摩滅)			10YR5/2 灰黃褐色	7.5YR5/3 にぶい橙色		透孔1残 古墳前期 (漆町 7~8群)	19			
15 22 1	SD07 (SD08 含む)	土器 蓋	土器 蓋	(39)			(68)	16	小片	△ ○	○ ○	ナデ ²	ナデ ²	ナデ ²	ナデ ²			7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR7/4 にぶい橙色		古墳初頭 (漆町 5~6群)	18		
15 23 1	SD07 (SD08 含む)	須恵器 壺蓋	須恵器 壺蓋	128	25			18	口 4	○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			5Y6/1 灰色	N7/7 灰白色	高松	V (9C前半)	20		
15 24 1	SD07 (SD08 含む)	須恵器 無台环	須恵器 無台环	134	27			86	口 1	△	△	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	高松	V 1 (8C末~9C前半)	22		
16 1 1	SD08	土器 壺	土器 壺	220	(41)			209	小片	△ ○ ○	○	ナデ ²	ナデ ²	ナデ ²	ケズリカ			10YR1/7/1 灰黃褐色	10YR6/2 灰黃褐色		擬凹線5条 弥生終 末(月影式)	26		
16 2 1	SD08	土器 壺	土器 壺	152	(55)				口 2	△ ○ ○	○ ○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			10YR6/4 にぶい黄 橙色	10YR6/4 にぶい黄 橙色		古墳初頭 (漆町 5~6群)	33		
16 3 1	SD08	土器 壺か	土器 壺か	154	(37)				128	口 2	△ ○ ○	△ ○	ヨコナデ	ハケ ナデ ²	ヨコナデ	ハケ			7.5YR7/3 にぶい橙色	10YR6/2 灰黃褐色		弥生中期頃か	43	
16 4 1	SD08	土器 壺	土器 壺	170	(50)				口 2	△ ○ ○	○ ○	ナデ ²	ハケ	ナデ ²	ハケ			10YR7/6/6 にぶい黄 橙色	10YR7/6/6 にぶい黄 橙色		口縁部ヘラ記号 弥生 後期(縦内系)	42		
16 5 1	SD08	土器 壺	土器 壺	158	(59)				口 4	○ ○	△ ○	ハケ		ハケ			10YR7/2/2 にぶい黄 橙色	10YR6/2 灰黃褐色		古墳初頭 (漆町 5~6群)	44			
16 6 1	SD08	土器 壺	土器 壺	120	(68)				口 2	○ ○	○ ○	(摩滅)	(摩滅)	ナデ ²	ケズリ			10YR1/7/1 灰黃褐色	10YR6/2 灰黃褐色		古墳初頭 (漆町 5~6群)	49		
16 7 1	SD08 砂層	土器 壺	土器 壺	146	(45)				口 1	○ ○ ○	○ ○ ○	ナデ ²	ミガキ	ナデ ²	ケズリ			2.5Y7/2 灰黃褐色	2.5Y8/1 灰白色		古墳初頭頃か (漆町 5~6群)	34		
16 8 1	SD08	土器 壺	土器 壺	137	(51)				98	口 1	○ ○	△ ○	凹線文 ハケ	ナデ ²	ナデ ²	ナデ ²			5Y4/1 灰色	2.5Y5/2 暗灰黃色		古墳初頭 (漆町 5~6群)	50	
16 9 1	SD08 砂層	土器 壺	土器 壺	244	(49)				口 5	○ ○ ○	○ ○ ○	ナデ ²	ナデ ²	ナデ ²	ナデ ²			7.5YR8/3 浅黄橙色	7.5YR8/3 浅黄橙色		弥生中期頃か (縦内系)	28		
16 10 1	SD08 砂層	土器 壺	土器 壺	(43)					小片	△ ○ ○	○ ○ ○	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ			10YR6/2 灰黃褐色	10YR7/2/2 にぶい黄 橙色		口縁部ヘラ記号 弥生 後期 (漆町 5~6群)	32		
16 11 1	SD08 粘質土 層下	土器 台	土器 台	(44)					100	杯底 2	△ △	○ ○	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ			10R4/6 赤色	10R4/6 赤色		弥生終末 (月影式)	25	
16 12 1	SD08 砂層	土器 台	土器 台	(78)					118	底 1	○ ○ ○	○ ○ ○	ミガキ	ハケ				2.5YR6/4 にぶい橙色	2.5YR7/2 明褐灰色		赤彩 孔3 古墳初 頭か	35		
16 13 1	SD08	土器 高坏か	土器 高坏か	(43)						小片	△ ○ ○	○ ○ ○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			7.5Y7/3 にぶい橙色	7.5Y7/3 にぶい橙色		凹線文4条 弥生終 末(月影式)	29	
16 14 1	SD08	土器 装飾器 台	土器 装飾器 台	(21)					216	小片	△ ○ ○	△ ○ ○	ナデ ²	ミガキ				10YR6/3 にぶい黄 橙色	5YR6/4 にぶい橙色		赤彩 弥生終末~古 墳初頭	41		
16 15 1	SD08 砂層	須恵器 蓋	須恵器 蓋	116	26				21	口 5	○ ○ ○	○ ○ ○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			5YR6/2 灰褐色	5YR7/3 にぶい橙色		IV 2頃 (8C後半)	90	
16 16 1	SD08	須恵器 蓋	須恵器 蓋	(19)					20	小片	○ ○ ○	○ ○ ○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			10YR7/1 灰白色	10YR7/1 灰白色		9C前半	39	
16 17 1	SD08	須恵器 無台环	須恵器 無台环	127	(32)					口 1	△ ○ ○	○ ○ ○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			5Y6/1 灰色	5Y6/1 灰色		V 2~VI (9C代)	51	
16 18 1	SD08 砂層	須恵器 無台环	須恵器 無台环	130	26					80	口 3	△ △	○ ○ ○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			2.5Y6/1 黄灰色	2.5Y6/1 黄灰色		IV 2 (8C後半)	36
16 19 1	SD08 砂層	須恵器 無台环	須恵器 無台环	122	32					70	口 6	△ ○ ○	○ ○ ○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			2.5Y5/2 黄灰色	2.5Y5/2 黄灰色		V 1 (8C末~9C初)	37

図版号	番号	類別	器種	法量(mm)				胎土				調整				色調		产地	備考	実測番号		
				口径 高さ	器高 内底径	底径 高さ	底径 受径	遺存度	硬 砂	骨 赤	焼成	口縁外側	口縁内側	胴部内側	底部内側	底部外側	外側 (釉色)	内面 (釉色)				
1620	1	SD08	須恵器無台坏	118	28			76	底6△	○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		回転ヘラ切	2.5Y6/1 黄灰色	2.5Y6/1 黄灰色	高松	V2~VI1(9C前半)	48	
1621	1	SD08	須恵器砂層	118	30			60	口2△	○	△	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		回転ヘラ切	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	高松	V2~VI1(9C前半)	91	
1622	1	SD08	須恵器砂層無台坏		27			64	底6○	△		ロクロナデ		ロクロナデ		回転ヘラ切	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色		V2~VI1(9C前半)	31	
1623	1	SD08	須恵器砂層有台坏	128	(38)				口1△	○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ			2.5Y6/1 黄灰色	2.5Y6/2 灰黄色		IV2~V1(8C後半~9C初頭)	45	
1624	1	SD08	砂層土師器甕		(18)			80	底9△△	○		ロクロナデ		ロクロナデ		回転糸切	10YR7/2 にぶい黄 橙色	10YR2/1 黒色			38	
1625	1	SD08	須恵器無台坏		(22)	81		68	底3△○	○		ロクロナデ		ロクロナデ		回転ヘラ切	N5/ 灰色	N5/ 灰色	高松	底部外面墨痕 筆な らし IV2~V2(8C 後半~9C前半)	47	
171	1	SD08	須恵器無台坏		(19)			60	底3△	○		ロクロナデ		ロクロナデ		回転ヘラ切	2.5Y7/1 黄白色	2.5Y7/1 黄白色		能美 か	93	
172	1	SD08	須恵器有台坏	108	36			91	口1○	○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		回転ヘラ切	2.5Y6/1 黄灰色	2.5Y6/1 黄灰色		能美 か	94	
173	1	SD08	須恵器砂層有台坏	126	35			85	底3○	○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		回転ヘラ切	N6/ 灰色	N6/ 灰色		能美 か	88	
174	1	SD08	須恵器砂層有台坏	118	42			75	底12○○	○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		回転ヘラ切	N6/ 灰色	N6/ 灰色		能美 か	89	
175	1	SD08	須恵器砂層有台坏	128	44			87	底12○	○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		回転ヘラ切	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	小松	墨溜 IV (8C中~後葉)	92	
176	1	SD08	土製品土鍾	32	33	32			完形								10YR7/4 にぶい黄 橙色			孔径7mm	30	
177	1	SD07 SD08	土器鉢	84	53			12	口6△○	△○	(摩滅)	指頭痕	(摩滅)	(摩滅)			7.5YR7/2 明褐色	7.5YR6/1 褐灰色		弥生終末~古墳初頭 (月影式末)	86	
178	1	SD07 SD08	須恵器無台坏	127	35			80	底12△	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ切	5Y7/1 灰白色	2.5Y7/1 灰白色	高松	V2(9C前半)	54		
179	1	SD07 SD08	須恵器有台坏	18				60	底8△○	○		ロクロナデ		ロクロナデ		回転ヘラ切	10YR5/1 褐灰色	10YR5/2 灰褐色	高松	底部外面墨書(不明) VI2(9C中葉)	101	
1710	1	SD07 SD08	須恵器有台坏		(16)			108	底12○	○	○	ロクロナデ		ロクロナデ		ヘラ切	5Y6/1 灰白色	10YR7/1 灰白色		転用硯か 内面墨痕 あり IV2(8C後半)	27	
1711	2	SK04	土器甕	176	(55)			134	小片○○	△○	(摩滅)	(摩滅)	(摩滅)	ケズリ			7.5YR7/4 にぶい黄 橙色	10YR7/3 にぶい黄 橙色		擬凹線3条 外面煤付 着 弥生終末(月影式)	57	
1712	2	SK04	須恵器無台坏	129	32	96			口4△	○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		回転ヘラ切	2.5Y5/1 黄灰色	2.5Y5/1 黄灰色	未	IV2(8C後半)	56	
1713	2	SK04	土師器甕		(25)			97	底4○○△△○	○		ナデ		ナデ		回転糸切か	5YR7/3 にぶい黄 橙色	10YR8/2 灰白色			58	
1714	2	SK05	須恵器無台坏	126	27			60	口4△	△	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切	2.5Y7/1 黄灰色	2.5Y6/2 黄灰色	高松	V2~VI2(9C中頃)	61		
1715	2	SK05	須恵器無台坏	130	30			60	底6○△	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切	5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	高松	IV2(8C後半)	59		
1716	2	SK05	須恵器無台坏	124	29			62	底2△	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切	2.5Y7/1 黄灰色	2.5Y7/1 黄灰色	IV2(8C後半)		62		
1717	2	SK07 下層	土器甕	176	(38)				口1△○	△○	ナデ		ナデ			10YR7/4 にぶい黄 橙色	10YR7/4 にぶい黄 橙色		擬凹線5条 古墳初頭 (漆町5~6群)	63		
1718	2	SK07 下層	土器台		(43)			35	脚3△○○	○△		ナデ		ナデ			2.5YR7/6 にぶい黄 橙色	2.5YR6/4 にぶい黄 橙色		孔3 古墳初頭 (漆町5~6群)	64	
1719	2	SK08	須恵器無台坏	134	35			80	底5△○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		回転ヘラ切	2.5Y8/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	高松	IV2(8C後半)	81		
1720	2	SK08	須恵器無台坏	128	31			77	底2△○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ		ヘラ切	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	高松	IV2(8C後半)	98		
1721	2	SD11	土器台		(36)			42	頸12△○	○○	(摩滅)		(摩滅)			7.5YR8/6 浅黄橙色	7.5YR7/4 にぶい黄 橙色		孔1残 古墳初頭 (漆町6群)	65		
1722	2	SD11	須恵器有台坏		(12)			74	底6△△	△	ロクロナデ		ロクロナデ		回転ヘラ切	10YR4/1 褐灰色	10YR5/1 褐灰色	小松	Vか (8C末~9C前半) 朱墨溜か	67		
1723	2	SD11	須恵器皿	156	16			128	口2△△	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切	2.5Y6/1 黄灰色	2.5Y6/1 黄灰色	未	V(8C末~9C前半)	66		
1724	2	SD12	土器甕	192	(63)				口1△○	△○	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y8/2 灰白色		布留系 古墳前期 (漆町7~8群)	70		
181	2	SD12 C6	土製品土鍾	62	27	25			ほぼ 完形	○	○						2.5Y8/1 灰白色			孔径11mm 黒斑	97	
182	2	SD12	須恵器無台坏		(15)			80	底4△△	○		ロクロナデ		ロクロナデ		回転ヘラ切	7.5Y6/1 灰白色	7.5Y6/1 灰白色	高松	底部外面墨書(#) IV2(8C後半)	96	
183	2	SD12	須恵器長頸瓶		(108)	176	83	底3△△	○		ロクロナデ		ロクロナデ		回転ヘラ切	2.5Y7/1 黄灰色	2.5Y6/1 黄灰色			69		
184	2	SD12 SD15	土器甕	155	(51)			132	口2○○	○	△	(摩滅)	(摩滅)	ナデ			7.5YR7/4 にぶい黄 橙色	7.5YR7/3 にぶい黄 橙色		擬凹線 古墳初頭 (漆町6~7群)	68	
185	2	SD14	須恵器無台坏	126	25			68	口1△○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色		IV2(8C後半) 36 と同一か	74		
186	2	SD14	須恵器有台坏	116	41			82	底3△○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切	N7/ 灰白色	N7/ 灰白色	高松	V1(8C末~9C初) ふくれあり	73		
187	2	SD15	土器甕		266	(37)			小片△○△	○	ナデ		ナデ			10YR4/1 にぶい黄 橙色			擬凹線6条 外面煤付 着 古墳初頭 (漆町5~6群)	77		
188	2	SD15	土器甕		(158)	(44)			口刃2○	○	△○	ナデ		ナデ			7.5YR8/4 浅黄橙色	7.5YR7/4 にぶい黄 橙色			76	
189	2	SD15	土器裝飾器台			(33)			受5△○△○	○		ナデ		ナデ			7.5YR7/6 橙色	7.5YR5/3 にぶい黄 橙色		涙滴形の透孔か 弥生終末~古墳初頭 (月影式の新)	78	
1810	2	SD15	土器台			(66)				頸12○○	○		(摩滅)		(摩滅)			10YR8/4 浅黄橙色	10YR8/3 浅黄橙色		古墳初頭 (漆町5~7群)	75
1811	2	SD15	土器小型甕	52	(49)	80			口2△○	○	ナデ	ナデ	ヨコナデ	ナデ			7.5YR6/2 灰褐色	7.5YR7/3 にぶい黄 橙色		古墳初頭 (漆町5~6群)	79	
1812	2	SD17	須恵器無台坏		(22)			70	底6△	△	○	ロクロナデ		ロクロナデ			2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	高松	内面墨痕 外面墨 書(「土」か「大」か) V2(9C前半)	72	
1813	2	SD21 B6	土器甕	(155)	(33)				小片○○	○	○	ナデ					7.5YR7/3 にぶい黄 橙色	7.5YR8/2 灰白色		古墳前期頃 (漆町6~7群)	83	
1814	2	SD21	土器甕	161	(30)				136口1○○	○	○	(摩滅)					7.5YR6/6 橙色	7.5YR6/6 橙色		古墳前期頃 (漆町6~7群)	82	
1815	2	SD21 C7	土器甕		(33)			25	底12○○	○○		ナデ		ナデ			7.5YR8/3 浅黄橙色	N1.5/ 黒色		内面炭化物付着	85	
1816	2	SD21 B6·C6	須恵器瓶か		(73)			118	底1○○	○	○	ロクロナデ		ロクロナデ		回転ヘラ切	N7/ 灰白色	5Y6/1 灰色	小松 か	内外面降灰	84	
1817	2	遺構検出	須恵器無台坏	138	34			70	口2△○	○	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切	2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y7/1 灰白色	高松	底部外面墨書(不明) 底部内面・体部に墨 痕 VI2(9C前半)	99		
1818	1	表土除去	須恵器無台坏		(18)			68	底3△○	○	○	ロクロナデ		ロクロナデ		ヘラ切	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y8/1 灰白色	高松	底部外面墨書「依」 V2~VI1(9C前半)	100	

木製品観察表

図版	番号	調査区	遺構	器種	法量 (mm)			備考	実測No
					長	幅	厚		
19	1	1	SK03	杭	(654)	74	33		K1
19	2	1	SK07 上層	板材	273	53	9	孔2 板目	E1
19	3	1	SD07	曲物円板	300	(205)	12	孔3 残	F3
19	4	1	SD07	棒材	334	33	33		L2
19	5	1	SD07	棒材	286	20	15	煤付着 着火剤か	K3
19	6	1	SD07	板材	403	44	14		K2
19	7	1	SD07	板材	(830)	93	17		F1
19	8	1	SD08	棒材	97	23	22	穿孔1か所 樹皮付着	
19	9	1	SD08	皿	(180)	(160)	(16)	外面鉄分付着か	L3
19	10	1	SD08 砂層	皿	140	116	21		E3
20	1	1	SD08	棒材	522	45	24	加工痕あり	C1
20	2	1	SD08 砂層	角材	(354)	33	26		J1
20	3	1	SD08 砂層	板材	(179)	39	7	未貫通の金属片1残	J3
20	4	1	SD07 SD08	斎串か	199	20	9		L1
20	5	1	SD07 SD08	斎串か	178	15	2		E2
20	6	1	SD07 SD08	斎串か	(197)	24	13		F2
20	7	2	SK04	用途不明	(430)	106	25	孔3 残	J2
21	1	2	SD12	用途不明	(78)	9	3		Q3
21	2	2	SD12	樹皮製品	37	42	21	穿孔2 残	Q2
21	3	2	SD17	棒材	114	9	9		J4
21	4	2	SD12 SD17	用途不明	135	45	31		Q4
21	5	2	SD19 SD20 SD21	用途不明	214	40	22		C3
21	6	2	SD19 SD20 SD21	板材	(480)	90	23	四角孔1残	Q1
21	7	2	SD19 SD20 SD21	板材	289	227	18	孔3 辺材	C4

石製品観察表

図版	番号	調査区	遺構 調査区	器種	法量 (mm)			色調	重量	備考	実測番号
					長	幅	厚				
18	19	1	SD08	敲石か	205	72	44	10YR6/1 褐灰色	1130		46
18	20	2	SD07 SD08	砥石	(54)	(42)	8	N6/ 灰色	25.5	砥面4面	87
18	21	2	SD16	砥石か	37	42	32	N8/ 灰白色	75	砥面2面	80

第5章 総括

第1節 出土した墨書土器について

本遺跡では、墨書土器、墨痕のある土器が多く出土しており、出土量に比して墨書土器の比率が高い。墨書土器は、「前」が3点、「真」、「屋」、「依」、「#」、「十」か「大」かが各1点、判読不明が2点出土している。墨痕があるものとしては、転用硯1点、墨溜め1点、筆ならし2点があり、特に朱墨溜め1点が特筆される。

「真」は人名として事例があり、「真縄」、「真足」、「真田」、「真継」、「真主」、などが確認されており、戸水C遺跡、戸水大西遺跡、大友西遺跡、大友E遺跡、金石本町遺跡、上荒屋遺跡等で出土がある。「前」は、「前宅」、「前院」などの事例があり、位置を示すものと考えられ、大友E遺跡等で出土があるが、本遺跡出土の場合は「前」一文字であるため何を示すかは不明である。「屋」は建物を示す例がある。(出越1998)「依」墨書土器は金沢市内で239点以上の出土がある。出土遺跡と出土数は、戸水C遺跡で100点以上、大友E遺跡99点、戸水大西遺跡18点、近岡遺跡3点等である。金沢平野臨海部の半径3kmの範囲内に集中的に出土しており、戸水C遺跡・大友E遺跡を頂点として周辺に拡散すると考えられている(出越2017)。「依」は祭祀性の濃い文字とされており、全国的に使用される「#」、「大」に対し、地域的に限定されると考えられている。「#」はドーマンとも呼ばれる魔除け符号と推定されている。(出越2017)。

第2節 まとめ

本遺跡では、主に弥生時代中期～古墳時代前期の土坑、ピット、溝、古代の土坑、溝が検出された。
〈弥生時代中期～古墳時代前期〉 古墳時代初頭～古墳時代前期頃の遺物が最も多く出土した。P04、P18、P21、SK02、SD04は、出土土器が小片であるが、弥生時代終末期～古墳時代前期に帰属するものと考えられる。SD15の細砂層からは、古墳時代初頭頃の土器細片が大量に出土した。SD08はやや大規模な溝跡と考えられ、弥生時代中期～古墳時代前期の土器が出土しており、ヘラ記号のある壺、赤彩高坏、装飾器台が出土している。

〈古代〉 8世紀後半～9世紀後半の奈良時代後期～平安時代前期が主体である。SK05、SD11、SD14は8世紀後半～9世紀中頃の間、SD12は8世紀後半以降に帰属するものと考えられる。SD08は8世紀中頃～9世紀前半頃に帰属するものと考えられ、本遺跡で最も多くの遺物が出土している。墨書土器「前」・「真」、墨溜め、挽物の皿、斎串等である。SK01、SK03、SD07は、本遺跡で最も新しい9世紀後半の遺物も出土しており、1区に集中している。SK01からは「屋」墨書、口縁内面に墨線のある壺、SK03からは赤彩土師器、SD07からは曲物円板が出土した。SK04、SK08、SD17、SD21は、両時期の遺物が同量出土しており、時期の判断が難しい。

今回の調査では、建物跡など生活に密着するような遺構は検出されなかった。集落の中心部は調査区東側もしくは隣接する遺跡に存在し、今回の調査区は集落の縁辺部にあたるものと考えられる。本遺跡から約150m北側に位置する近岡ナカシマ遺跡では、平安時代前期の桁行7間×梁行2間の大型掘立柱建物、隅柱縦板組の井戸が見つかっており、「中」等の墨書土器が出土している(金沢市教育委員会1986)。また、約700m西側に位置する戸水C遺跡は、8世紀後葉の「官」が2点、9世紀後葉の「津」が4点出土しており(出越2021b)、港湾官衙遺跡としての性格付けが定着している(北野1997)。戸水C遺跡は海上交通と河北潟水運の結節点にあり、同遺跡を中心とする水運による広域流通網の形成及び交易活動が想定されている(出越2021b)。さらに、本遺跡から約300m南側に位置する大友E遺跡は、農地経営の施設名を示すとされる「田舎」、文書・記録を司る役職名とされる「案主」、巡方などの公的遺物、「申請」と書かれた漆紙文書が出土していることから、農耕に関する管理施設であり(景山2016)、祭祀に関する墨書土器が長期的に多数出土することから専業祭祀集団の存在が想定されている(出越2017)。以上のように、本遺跡周辺は、役所のような要所が集中するエリアといえる。本遺跡からは「依」「#」といった戸水C遺跡や大友E遺跡などの拠点集落を頂点とし

て拡散する祭祀関係墨書が出土しており、付近に要所となる集落が存在することを示唆している。縁辺部ではあるが、戸水C遺跡を中心とする臨海地域の集落群の一端が明らかになったといえる。

参考文献

- 金沢市教育委員会（1986）「金沢市近岡ナカシマ遺跡」

景山和也（2016）「第6章 第3節 SD3002出土の墨書き土器」『大友E遺跡－大友遺跡群－』金沢市埋蔵文化財センター

北野博司（1997）「17-20 戸水C遺跡」『石川県出土文字資料集成』石川県埋蔵文化財保存協会

田嶋明人（1986）「IV考察 一漆町遺跡出土土器の件念的考察一」『漆町遺跡I』

田嶋明人（1988）「古代土器編年軸の設定」『北陸の古代土器研究の現状と課題』北陸土器研究会

出越茂和（1997a）「北陸古代後半における椀皿食器（前）」『北陸古代土器研究』第6号

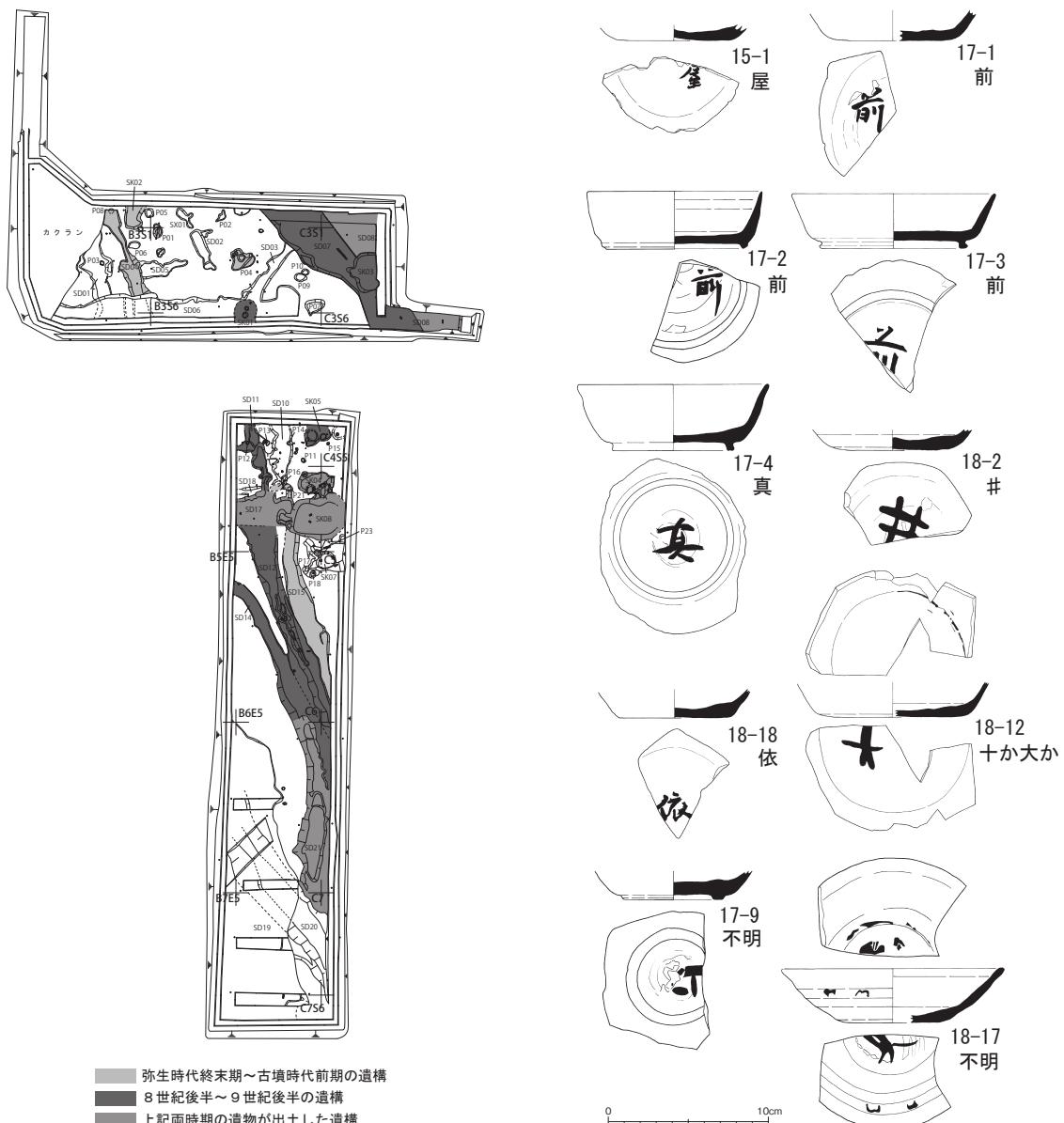
出越茂和（1997b）「北陸古代後半における椀皿食器（後）」『北陸古代土器研究』第7号

出越茂和（1998）「古代墨書き土器の諸問題」『古代北陸と出土文字資料』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会

出越茂和（2017）「古代祭祀と墨書き土器」『石川県史だより』第57号 石川県立図書館

出越茂和（2021a）「大友E遺跡出土の墨書き土器について」『大友E遺跡』金沢市埋蔵文化財センター

出越茂和（2021b）「加賀の古代津湊と交通」『北陸と世界の考古学：日本考古学協会2021年度金沢大会資料集』日本考古学協会2021年度金沢大会実行委員会



第22図 遺構変遷図

第23図 出土した墨書き器



全体俯瞰写真



遠景写真（南東から）



2区 遺構完掘（北から）



2区 遺構完掘（南西から）



1区 遺構完掘（南西から）



1区 SD07・SD08 南側断面



1区 SD07・SD08 北側断面



2区 SD12・14・15 断面



2区 SD20 断面



2区 SK08 断面



出土墨書土器（第15図1・第17図1～4・9・第18図2・17・18）



1区 SD08 出土遺物（第16図1～14）



1区 SK03 断面



2区 SK07 断面



1区 SD08 第16図15出土状況



1区 SD08 第17図5出土状況



1区 SD08 第19図3出土状況



1区 SD08 第19図9出土状況



2区 SK08 編物状植物纖維出土状況



1区 第15図1 (SK01) 赤外線像



1区 第15図2 (SK01)



1区 第15図12・第16図25 (SD08) 赤外線像



1区 第16図5 (SD08) 赤外線像



1区 第17図1・第17図2 (SD08) 赤外線像



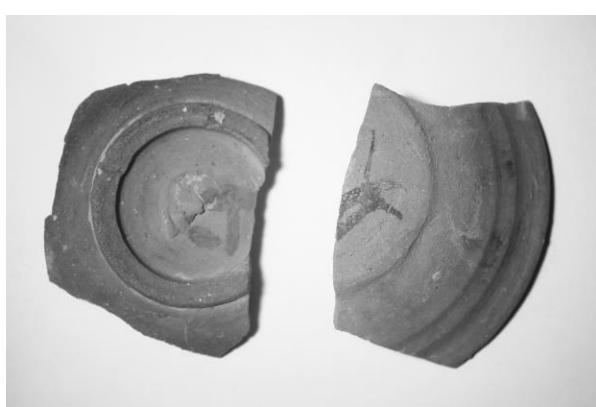
1区 第17図3 (SD08) 赤外線像



1区 第17図4 (SD08) 赤外線像



1区 第17図5 (SD08) 赤外線像



1区・2区 第17図9 (SD07・08)・
第18図17 (遺構検出時) 赤外線像



2区 第17図22 (SD11) 赤外線像



2区 第18図2 (SD12) 赤外線像



2区 第18図12 (SD17) 赤外線像



2区 第18図18 (表土除去時) 赤外線像



1区 第19図10 (SD08)



1区 第20図4~6 (SD07・08)



2区 第20図7 (SK04)



2区 第21図2 (SD16)

報告書抄録

石川県金沢市
近岡シタンダ遺跡

（『金沢市文化財紀要』362）
令和7年（2025）3月31日発行

発行 金 沢 市
編集 金沢市埋蔵文化財センター
〒920-0374
石川県金沢市上安原南60番地
TEL（076）269-2451

印刷 田中昭文堂印刷株式会社
〒920-0377
石川県金沢市打木町東1448番地
TEL（076）269-7788